

# 絵本



コラム

## 絵本は、大人が子どもに読んであげる本です

絵本は、子どもに読ませる本ではなく、大人が子どもに読んであげる本です。《略》子どもにとって、絵本は外側からながめているものではなく、自分がその絵本の中の人物になったような気持ちで、絵本の物語の世界へ入り込むものです。そこには 耳から聞こえてくる物語のことはやリズムと目で見るさし絵の描き方や場面の進み方が、ぴったり一致していませんと、物語の世界へは入れません。《略》子どもが好きな絵本は、繰り返し読んであげること。それが読書への大切な入り口です。読書は字を読むことではなく、一冊の本の中へ、夢中になって我を忘れて入り込み楽しむことです。

【元JBBY会長 松居直「絵本の与え方」《福音館書店》より引用】



コラム

## 子どもが本好きになるか否かは、 絵本の中で味わった楽しみの量によります

もともと絵本が嫌いな子どもなどいません。嫌いになったのは、読んでくれる人がいなかったか、テレビばかり見せられていたか、あまりに文章も絵も物語もひどい絵本、あるいはワークブックや総合絵本、つまり勉強に役立つように見えるもののみ与えられていたか、せっかく読んでもらっても質問されたりお説教されたり…、そんな理由しか考えられません。

絵本の中で、存分に遊ぶことができなかったのです。本嫌いな子がいるのではなく、本嫌いにさせる大人がいるだけなのです。

【児童文学作家 斎藤惇夫(愛川町子どもの読書を推進する会主催講演会より)】



## いないいないばあ

松谷 みよ子 作 瀬川 康男 絵  
 童心社 1967年 21×19cm



猫や熊やねずみなどが顔を両手でかくしている「いない いない…」のページと、顔をみせて「ばあ」というページが繰り返されています。

いない、いない、ばあ、と遊ぶことを覚えはじめたころに出会いたい絵本です。見えていたものが見えなくなって心配、見えないものがまたすぐ現れて安心という、心の動きが伝わってきます。「ばあ」と笑顔で現れる動物たちの表情はなんとも愛らしいのです。

「松谷みよ子あかちゃんの本」には他に『おさじさん』『いいおかお』（童心社）などがあります。

## がたんごとんがたんごとん

安西 水丸 作  
 福音館書店 1987年 18×19cm



走る汽車にのせてもらうのは、哺乳びん、コップとスプーン、りんごとバナナ。ねずみやねこも乗り込みます。身の回りにあるものが中心で、どれも小さな子が知っているものばかりです。

「がたんごとん がたんごとん」「のせてくださーい」と繰り返される言葉のリズムが楽しく、子どもたちは喜びます。

他に『がたんごとん がたんごとん ざぶんざぶん』（福音館書店）があります。

## くだもの

平山 和子 作  
 福音館書店 1981年(こどものとも1979) 22×21cm



まるで、本物の果物が目の前にあるような描写と色彩です。ページを開くと大きな「すいか」が丸ごと描かれ、次の見開きには「さあ どうぞ」と、切ってお皿にのせられているすいかの絵があります。そして「もも」「ぶどう」「なし」「りんご」など、必ずすぐに食べられるように用意された絵があるので、「さあ どうぞ」という言葉に、思わず口を開けて食べてしまいそうです。

子どもと一緒に、「くだもの」の世界を楽しめる絵本です。

## きんぎょがにげた

五味 太郎 作

福音館書店 1982年(こどものとも1977) 22×21cm



金魚鉢にいた金魚が逃げ出し、カーテンの赤い水玉模様の中にかくれます。そしてそこを逃げ出し、次に植木鉢の赤い花の所に。また逃げて、キャンディーボックスの中に…。あちらこちらへと逃げだして、最後には、大きな池のたくさんの金魚の仲間になります。

指差しができるようになったら「きんぎょはどこ?」「これ!」と親子で遊べる楽しい一冊です。

他に、子どもにとって興味深い「うんち」を、科学の視点からユーモアをまじえて描かれた絵本『みんなうんち』(福音館書店)があります。

## どうぶつのおかあさん

小森 厚 ぶん 藪内 正幸 え

福音館書店 1981年(こどものとも1977) 22×21cm



「おかあさんねこは こどもを くわえてはこびます。」から始まります。お母さんざるはお腹にしっかりしがみつかせ、コアラは負ぶって運びます…。動物のおかあさんが、自分の子どもを運んでいる様子がリアルに描かれています。

やわらかな毛の手ざわりや息づかいを感じさせ、今にも動き出しそうな絵は、小学生の頃から毎日動物園に通い、多くの図鑑絵本を手がけた画家なればこそでしょう。

どんなときも手放さない母のゆるぎない愛情、子どもたちの安心しきった表情が伝わってくる一冊です。

他に『どうぶつのおやこ』(福音館書店)があります。

## あがりめさがりめーおかあさんと子どものあそびうたー

真島 節子 絵

こぐま社 1994年 24×19cm



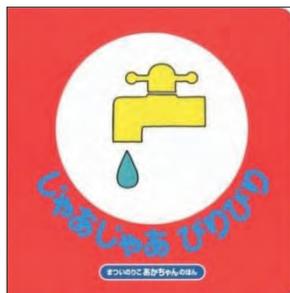
親子で、またお孫さんといっしょに楽しめるわらべうたの絵本です。「あがりめさがりめ」のほかに「ずいずいずっころばし」「ちょちちょちあわわ」「いもむしろごろろ」など、おなじみの手遊びや体を使った遊びのためのわらべうたが満載です。「ぎっちらこ」は子どもと体を向い合せにして手をつなぎ、ふねをこぐしぐさ遊びです。

手遊び歌やわらべうたは、昔から歌い継がれてきたものですから、時代や地方によってもまちまちです。自己流でもまずは歌ってみましょう。

姉妹編『あんたがたどこさ』(こぐま社)があります。どちらにも参考楽譜集がついています。

## じゃあじゃあびりびり

まつい のりこ 作・絵  
偕成社 1983年 14×14cm



「じどうしゃ ぶーぶーぶーぶー」「いぬ わんわんわんわん」「みず じゃあじゃあじゃあ」「かみ びりびりびりびり」…。見開きページに一つの音。ページを捲るごとに、赤ちゃんの身近にある“音”が、次から次へと登場してきます。

カラフルな色づかいでシンプルに描かれている絵は分かりやすく、文字はとてもリズムカルに配置されています。

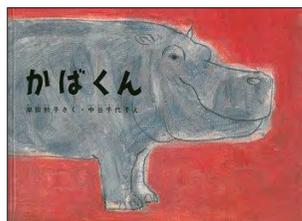
コンパクトサイズで厚紙仕様のため、とても丈夫に造られています。

“自分の娘に手作りの絵本を”という作者の想いがこもった1冊です。

『ぼーる ころころぼーん』(講談社)でボローニャ世界図書展エルバ賞を受賞。

## かばくん

岸田 衿子 作 中谷 千代子 絵  
福音館書店 1966年(こどものとも1962) 20×27cm



「どうぶつえんに あさが きた」で、日曜日の動物園の一日が始まります。

少年の引くひもにつながれて、やってきたかめ。「や かめくん」「や かばくん」と挨拶をかわし、かばの親子と過ごします。見物にきた沢山の人と一緒に眺めたり、エサを食べおなか一杯になってひと休みするかばの背中に乗ったりして…。やがて「さよなら」をしたかめは、少年に引かれて帰っていき、「おやすみ かばくん どうぶつえんに よるがきた…」で、動物園の一日は終わります。

大きなかばの親子と小さなかめの対比やかばの特徴が美しい絵と簡素でリズムのある文章で描かれ、ゆったりとした気持ちになります。欧米でも翻訳出版され高い評価を受けています。

## しろくまちゃんのほっとけーき

わかやま けん 作  
こぐま社 1972年 20×21cm



しろくまちゃんがお母さんと一緒にホットケーキをつくります。卵を割って、牛乳を入れて…。混ぜながらこぼしてしまったりしながらも、おいしそうなホットケーキが出来上がります。焼き上がったらかぐまちゃんを呼んで二人で「おいしいね」。最後は一緒にお皿を洗い「おいしかったね」。

見開き2ページにわたってフライパンの上でホットケーキが焼けていく様子が独特の擬音入りで描かれています。甘く香ばしいにおいまで伝わってきそうです。自分でつくることの楽しさ、つくる過程のおもしろさ、食べることのうれしさを子どもが実感できる作品です。

## ちいさなねこ

石井 桃子 さく 横内 襄 え

福音館書店 1967年(こどものとも1963) 20×27cm



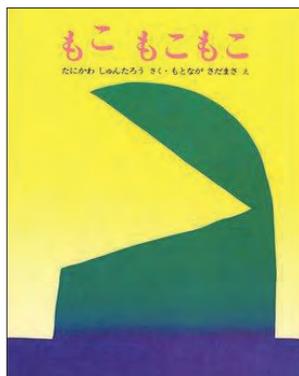
ちいさなねこが、母親の見ていない間に、ひとりで外に飛び出していきます。子どもに捕まったり、自動車の方へとび出したり、大きな犬に追いかけられたり、ハラハラドキドキの連続です。高い木のでっぺんでないところを、母親が見つけ、犬を追っばらしてくれます。そして、くわえて下ろしてくれ、我が家へ…。

冒険心いっぱい、恐れを知らないちいさなねこの表情や、危険な目に遭った時の、びっくりしたり、反撃したり、逃げたりする様子や表情が、いきいきと描かれています。子どもは、ちいさなねこの姿に自分を重ね合わせ、母親の元に帰る結末に安心するでしょう。

## もこ もこもこ

谷川 俊太郎 作 元永 定正 絵

文研出版 1977年 29×23cm



静まりかえったしーんとしているところに“もこ”と“によぎ”が出てきます。ふたつはすごく大きくなって、“もこ”は“によぎ”を食べてしまいます。すると赤い丸いものがつんと出てきて、だんだん大きくなって、ぱちんとはじけてしまいます。ふんわふんわととんでいき、また静まりかえったところに戻ってきます。

きれいな色とシンプルな絵と美しい装丁。言葉は「ばく」「もぐもぐ」「つん」「ぼろり」など擬音語ばかりで、不思議な世界ですが、心が引きつけられます。

生後4ヶ月の赤ちゃんにこの絵本を読んでもあげると、興味深そうにじっと絵本を見つめ、にこにこし、赤ちゃんの心をしっかりとらえているのがわかります。

他に『ココロのヒカリ』(文研出版)があります。

## わたしのワンピース

にしまき かやこ 作・絵

こぐま社 1969年 20×22cm



「まっしろなきれい ふわふわって そらから おちてきた」。そこで、ウサギの女の子は、ミシンをカタカタと心地よい音をさせながら、真っ白なワンピースを作りました。

お花畑をお散歩。あらら、ワンピースが花模様になりました。雨が降ってきました。ワンピースは水玉模様。草の実の中に入るとワンピースは草の実模様。小鳥たちが草の実を食べにやってくると、ワンピースは小鳥の模様。小鳥模様のワンピースと一緒にわたしも空に向かって飛び上がりました。そして、虹に出会い、お星さまに出会い…。

次々に模様が変わる素敵なワンピースは、想像の世界に誘ってくれます。

## おおきなかぶ

A・トルストイ 再話 佐藤 忠良 絵 内田 莉莎子 訳  
福音館書店 1966年 20×27cm



おじいさんがかぶを植えました。「あまい あまい かぶになれ おおきな おおきな かぶになれ」と言うと、とてつもなく大きなかぶができました。

大きなかぶは、おじいさん一人では抜けません。おばあさん呼んできて、二人でひっぱっても抜けません。孫をよんできて、犬を呼んできて、猫を呼んできて抜けません。ねずみを呼んでくると…。

「うんとこしょ、どっこいしょ」の繰り返しの場面では、子どもたちも一緒に声を出してくれます。「やっとかぶは抜けました」で、大喜びです。

ロシアの民話です。

## おやすみなさいおつきさま

マーガレット・ワイズ・ブラウン 文 クレメント・ハード 絵 瀬田 貞二 訳  
評論社 1979年《アメリカ 1947》 17×21cm



「おおきな みどりのおへやのなかに でんわが ひとつ あかい ふうせん ひとつ えの がくが ふたつ——」。こうさぎがベッドにいます。窓の外にはお月さまとお星さま。ひとつひとつに「おやすみおへや」「おやすみおつきさま」と声をかけていくこうさぎ。おやすみを言うたびに部屋はだんだん暗くなっていき、やがて…。

こうさぎから見える部屋全体をカラーページで、そして部屋にあるひとつひとつのものをモノクロで描写し、静かに、心地よい眠りへと誘います。

他に『おやすみなさいのほん』(福音館書店)があります。

## はらぺこあおむし

エリック・カール 作 もり ひさし 訳  
偕成社 1976年《アメリカ 1969》 22×30cm



あたたかい日曜日、たまごから一ぴきのあおむしがうまれました。あおむしは食べ物を探し始めます。月曜日、りんごをひとつたべました。まだ、おなかはぺこぺこです。火曜日、なしをふたつたべました。やっぱりおなかはぺこぺこ。曜日を追うごとに食べ物が増えていきます。食べ続けたあおむしは…。

繰り返しの楽しさや、その食べ物に、あおむしが食べた後をイメージさせる小さな穴が空いていて、指を入れて読んでいくと、あおむしと一緒にたべた気分になれるおもしろさがあります。

鮮やかな色彩の中であおむしに変化していく様子など、絵本の楽しさに引き込まれていきます。

## あおくとときいろちゃん

レオ・レオーニ 作 藤田 圭雄 訳  
 至光社 1967年《アメリカ 1959》 21×21cm



あおくんはお友だちが沢山います。いちばんの仲良しはきいろちゃんです。あるとき、あおくんはきいろちゃんに会いたくて、あちこちさがして、とうとう街角でばったり。あおくとときいろちゃんはうれしくなって、ひとつになったらみどりになってしまいました。みどりになってしまったあおくとときいろちゃんは…。

丸くちぎったような青や黄色の色紙が、大きさや配置によって、心の動きや感情を見事に伝え、物語を紡いでいきます。作者が2人の孫を汽車の旅で退屈させないようにと、持っていた雑誌を手でちぎって、即興の話を聞かせながら作った絵本です。

## 14ひきのあさごはん

いわむら かずお 作  
 童心社 1983年 27×19cm



おとうさん、おかあさん、おじいさん、おばあさん、そしてきょうだい10ひき、あわせて14ひきのねずみの大家族が、四季の美しい自然の中で協力し合い生活する姿を、ていねいに描いた絵本です。「ひっこし」では14ひきが森の奥の大きな木の根っこを見つけるまでの道中が、見つけてからはみんなで力をあわせて部屋を作ったり、水道をひいたり、橋をかけたりする様子が描かれています。

ねずみの目の高さに見点をおいて、写実的に描かれた絵はまるで森の中にいるようです。そして表紙に書かれた名前を確認しながら、一ひき一ひきのちがう表情やしぐさを、絵から読み取っていく楽しさにあふれています。

「14ひきのシリーズ」の1作めです。

## ティッチ

パット・ハッチンス 文・絵 いしい ももこ 訳  
 福音館書店 1975年《アメリカ 1971》 26×21cm



末っ子のティッチは、小さいからと、兄さんや姉さんのように大きな自転車ではなくちいさな三輪車。大きなたいこやラッパでなく小さな木の笛などなど。兄姉をうらやましく思っているのです。

ある日、兄さんの大きなシャベルで、姉さんの大きな植木鉢に、ティッチはちいさな種を蒔きました。大事に育てていくと、種はぐんぐん育って…。

最後のページのティッチの得意な顔がなんともいえません。

続編に『ぶかぶかティッチ』(福音館書店)『きれいずきティッチ』(童話館出版)があります。他に『ロージーのおさんぽ』(偕成社)があります。

## ぐりとぐら

中川 季枝子 文 大村 百合子 絵

福音館書店 1967年(こどものとも1963) 20×27cm



森の奥で大きな卵をみつけたのねずみのふたり。「ぼくらのなまえは ぐりとぐら このよでいちばん すきなのは おりょうりすること たべること ぐり ぐら ぐり ぐら」。リズムカルな歌にあわせてふたりが作ったカステラのおいしいそうなこと。森の動物たちもあわせそうです。最後に残った大きな卵の殻でふたりが作ったものは…。

他に『ぐりとぐらの えんそく』『ぐりとぐらの おきゃくさま』『ぐりとぐらの かいすいよく』『ぐりとぐらと すみれちゃん』『ぐりとぐらと くるりくら』『ぐりとぐらの おおそうじ』(福音館書店)などがあります。そして、『ぐりとぐらの 1ねんかん』『ぐりとぐらの うたうた12つき』(福音館書店)は、その月のページを開いて飾っておきたくるような作品です。

## かいじゅうたちのいるところ

モーリス・センダック 作 神宮 輝夫 訳

富山房 1975年《アメリカ 1963》 23×25cm



いたずらをして大あばれしたマックスは、お母さんにおこられて寝室にほうりこまれてしまいます。すると寝室に木が生え、森になり、海になって、舟がマックスをかいじゅうたちのいるところに運びます。かいじゅうたちに気に入られ王さまになったマックスはご機嫌に遊びますが、さびしくなってやさしいだれかさんのところへ帰りたくなります…。

かいじゅうたちのいる空想の世界から、おいしいにおいで現実の世界にもどっていきます。そこには、まだほかほかとあたたかい夕ご飯が…。子どもたちに愛され続けている絵本です。

他に『まどそのそのまたむこう』(福音館書店)があります。

## ねずみくんのチョコッキ

なかえ よしを 作 上野 紀子 絵

ポプラ社 1974年 25×21cm



小さなねずみくんが、おかあさんに編んでもらった赤いチョコッキを着て大満足です。「ぴったりにあうでしょう」と立っていると、「いいチョコッキだね、ちょっときかせてよ」とあひるやさるやライオンがやってきます。ねずみくんのチョコッキは次々に大きな動物に渡り、無理にひっぱられ、ぞうが着たあとは…。

ページをめくるたびに動物たちの表情はユーモラスで、そして、やさしさあふれるねずみくんの世界は子どもたちから大人まで愛されつづけています。

最新作『へんしーん ねずみくん』(ポプラ社)まで、シリーズは31冊になります。

## わたしとあそんで

マリー・ホール・エッツ 文・絵 与田 準一 訳  
福音館書店 1968年《アメリカ 1955》 27×20cm



はらっぱへ遊びに行った女の子。動物たちといっしょに遊びたくて、バッタやカエルやカメ等に近づき、捕まえようとする、みんな逃げてしまいます。

だれも遊んでくれないので、仕方なく、池のそばに腰かけてじっとしていると、バッタやカエルやカメなどたくさんの動物たちが寄ってきて、いっしょにいてくれます。そして…。

小さな動物との交流を、この上なく温かく諷いたげな物語です。自然との関わり方を教えられるとともに、みんなと一緒に過ごせる喜びが伝わってきます。また、淡い色彩と柔らかいタッチの絵が心をなごませてくれます。

## どうぞのいす

香山 美子 作 柿本 幸造 絵  
ひさかたチャイルド 1981年 24×21cm



うさぎさんが小さいいすをつくりました。そのいすを木のそばにおき、「どうぞのいす」という立札をたてました。

そこへやってきたらばさんが立札を見て、どんぐりのいっぱい入ったかごをいすに置き、木に寄りかかってお昼寝を始めます。次にやって来たくまさんは、どうぞならと遠慮なくどんぐりをいただきますが、空っぽになっては後の人にお気のどくと、自分の持ってきたものを置いていきます。そのあと次々にやってくる動物たちもおなじようにして…。

次の人のために、といこころ遣いが、優しい気持ちにしてくれます。  
続編に『ごろりん ごろん ころろろろ』（ひさかたチャイルド）があります。

## はなをくんくん

ルース・クラウド 文 マーク・シーモント 絵 きじま はじめ 訳  
福音館書店 1967年《アメリカ 1949》 31×22cm



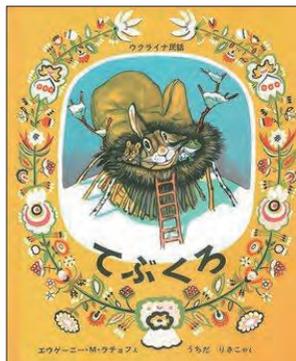
雪が降る森の中では、のねずみも、くまも、かたつむりも、やまねずみもみんな眠っています。春になり、みんな冬眠から目覚め、次々に、はなをくんくんさせて駆けだしました。そして、ぴたりと止まり、輪になって笑ったり踊ったり「うわあい」とさげんだりしました。

そこには春の訪れを知らせる一輪の花が咲いていました。

雪の降る森の静けさや長い眠りから自覚めた動物たちの表情が、白地に墨の濃淡だけで、豊かに描かれています。最後に現れる小さな黄色い花がとても輝いていて、春の訪れが嬉しく、ほのぼのとした気持ちになります。

## てぶくろ

エウゲーニー・M・ラチョフ 絵 内田 莉莎子 訳  
福音館書店 1965年《ロシア 1951》 28×23cm



おじいさんが雪の上に、手袋を片方落として行ってしまいました。そこへねずみやうさぎ、きつね、おおかみ…と森の動物がやってきて、わたしもいれてともぐりこんできます。いのししやくままで、いれてと言いますが、住人たちは無理ですと断ります。しかし、無理やりに入ってきてしまいます。てぶくろは今にも弾けそうです。そこへおじいさんのこいぬがやってきて…

動物たちが繰り返す問答のおもしろさと、手袋が家のように変化していく細かい描写を、子どもたちは喜びます。

ウクライナの民話で、動物たちの民族衣装も魅力的です。

## 三びきのやぎのがらがらどん

マーシャ・ブラウン 絵 瀬田 貞二 訳  
福音館書店 1965年《アメリカ 1957》 26×21cm

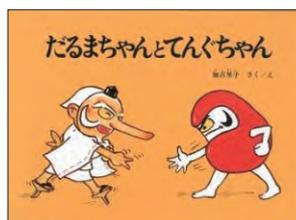


名前はどれも「がらがらどん」という三びきのやぎが、「やまのくさばでふとろう」と山へ登っていきます。ところが、途中の谷川の橋の下に、恐ろしい怪物のトルルが住んでいて、やぎたちを食べようとします。小さいやぎと中くらいのやぎがうまくかわして渡って行ったあと、大きいやぎのがらがらどんが「ガタンゴトン」と橋を揺らしながらやってきて、トルルをこっぴみじんにし谷川へつきおとしてしまいます。三びきのやぎは…

ノルウェーの昔話絵本です。他に、民話をもとにした絵本『せかいいちおいしいスープ』（岩波書店）があります。

## だるまちゃんとてんぐちゃん

加古 里子 作・絵  
福音館書店 1967年(こどものとも1967) 20×27cm



だるまちゃんは、てんぐちゃんと遊んでいると、てんぐちゃんの持っているうちわが欲しくなりました。だるまちゃんは、てんぐちゃんの「ぼうし」「はきもの」「はな」と次々に欲しくなりお父さんにおねだりします。そのたびにお父さんは、ありとあらゆる種類の物を用意してくれるのですが、気に入るのはいつもその中の物ではなく、身近な物の中から見つけ出してしまいます。

そのからくり気づいた読者は、ページのすみずみまで見わたし、だるまちゃんのお気に入り、ワクワクドキドキしながら発見し、楽しむことができます。

続編『だるまちゃんとかみなりちゃん』（福音館書店）など、だるまちゃんシリーズは子どもたちに親しまれています。

## そらまめくんのベッド

なかや みわ 作 絵

福音館書店 1997年(こどものとも1999) 20×27cm



そらまめくんの宝ものは、雲のようにふわふわで、綿のようにやわらかいベッドです。えだまめくんやグリーンピース兄弟などのお豆仲間も、眠ってみたいと頼みに来ますが、そらまめ君は貸してあげないといいます。そんなある日、そらまめくんの大事なベッドがなくなってしまったのです。はじめはいい気味だと思っていたみんなも、だんだんそらまめくんがかわいそうになってきました…。

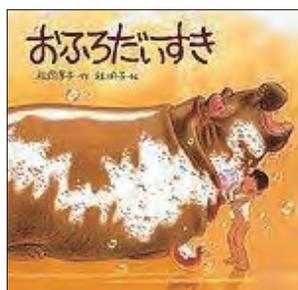
パステル調に色鉛筆タッチの可愛い絵と、思いやりを感じとれるストーリーに心が温かくなります。

「そらまめくん」はシリーズになっています。

## お風呂だいすき

松岡 享子 作 林 明子 絵

福音館書店 1982年 26×27cm



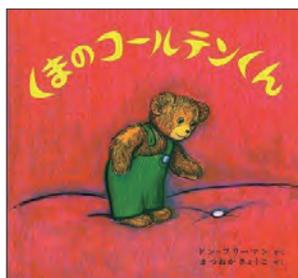
ぼくはお風呂に入る時、いつもあひるのブッカをつれていきます。ブッカがお風呂の底に何かいるよと言います。なんと大きなウミガメが現れます。兄弟ペンギンがぼくの落とした石鯨(イサナ)を追いかけています。オトセイも現れ大きな大きなシャボン玉を回し始めます。かばさんも出てきたり、そして、とうとう大きなクジラまで現れます。

お風呂の湯気と柔らかい色調の中で、子どもが夢や空想の世界を、どんどんふくらませて遊び、そして現実に戻っていく、そんな子どもならではの世界を楽しめる絵本です。

## くまのコールテンくん

ドン・フリーマン 作 松岡 享子 訳

偕成社 1975年《アメリカ 1968》 23×25cm



大きなデパートのおもちゃ売り場にいたくまのぬいぐるみのコールテンくんは、誰か来て、自分を家に連れて行ってくれないかなあと思っていました。

ある日、女の子がコールテンくんを買おうとしますが、ボタンが一つとれているので、母親に反対されてしまいます。そこで、コールテンくんは、夜、ボタンを探しにデパートの中を探検します。

次の日、コールテンくんを忘れられずにやってきた女の子が…。

くまのぬいぐるみと女の子の出会い、優しさにあふれ、こころが温まります。

## いえでだブヒビ

柳生 まち子 作

福音館書店 1997年 27×22cm



3匹のこぶたたちは毎日、けんかをしたり、片付けをしなかったり、好き嫌いを言ったりで、お母さんの言う事をききません。ついにお母さんから「お母さんの言うことを聞けないこはうちのこじゃありません。どこへでもいきなさい！」と怒られ、こぶたたちは家出を決行します。うさぎの家の子になろうとしたり、ワニの家の子になろうとしたり、3匹だけで野宿もしてみます。でも、やはり自分の家とは居心地が違います。最後は、やっぱりいつものお母さんのもとで…。

子どもが居る日常の家庭の様子を、ユーモラスに、また繰り返しのリズムで子どもの心理を表しています。

## おだんごばん

脇田 和 絵 瀬田 貞二 訳

福音館書店 1966年 31×22cm



おなかをすかせたおじいさんが、家中の粉をかき集めて、おばあさんに、おだんごばんをつくってもらいます。焼き上がったおだんごばんは、ころころとこころがって、外へ逃げ出すと、出会ったうさぎやおかみに食べられそうになります。うまく逃げながら 最後に出会ったのは □のうまいきつね…。

全体が柔らかなタッチで描かれ、暖色基調に彩りされた絵が「ぼくは、てんかの おだんごばん。ぼくは、こなばこ ごしごし かいて、」と軽快で親しみのあるリズムの訳と共に、自然とおだんごばんの世界に引き込まれていきます。

ロシアの民話です。

## もりのなか

マリー・ホール・エッツ 文・絵 まさき りこ 訳

福音館書店 1963年《アメリカ 1944》 19×27cm

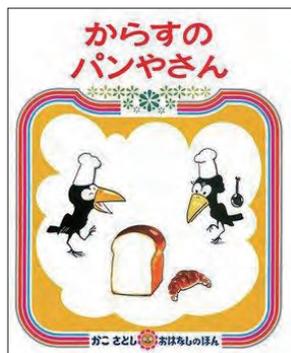


ぼくは、かみのぼうしをかぶり、あたらしいラッパをもって、もりにさんぼにでかけました。すると、もりのなかのどうぶつたちがぼくのさんぼについてきました。こわがっていたうさぎもくわって、みんなでいろいろなあそびをしました。さいごにかくれんぼをして、ぼくがおにになり「もういいかい！」といって目をあげました。するとぼくのお父さんがいて動物たちは一びきもいなくなっていました。ぼくはお父さんの肩車に乗って家に帰りました。

こどもの想像の世界を描いたものだけに、版画風のタッチで描かれている単色刷りの良さが生かされている絵本です。

## からすのパンやさん

かこ さとし 文・絵  
偕成社 1973年 21×25cm



森の中のカラスのパン屋さんに可愛い4羽のカラスが生まれました。子どもたちのために作ったおやつパンが、カラスの子どもたちに人気になり、いろいろな形のパンをたくさん作りお店で売ることになりました

見開きいっぱいには80種類以上の変った形の楽しそうなパンが描かれているページは、子どもだけでなく、大人も見入ってしまうほど魅力的です。

4羽の赤ちゃんカラス「オモチちゃん」「レモンちゃん」「リンゴちゃん」「チョコちゃん」そしてその他のカラスの表情も楽しめる絵本です。

4羽のカラスが成長して食べ物屋さんを開くまでの絵本が、続編として出されています。

## しょうぼうじどうしゃじぶた

渡辺 茂男 作 山本 忠敬 絵  
福音館書店 1966年(こどものとも1963) 20×27cm



ある町の消防署に、古いジープを改造して作った、小さな消防自動車のじぶたがいました。

はしご車ののっぽくん、高圧車のばんぶくん、救急車のいちもくさんはいつも大活躍しますが、じぶたはいつも小さなぼやの時しか出動できません。ところがある日、となり村の山小屋が火事になり、じぶたにしか通れない山道に行くことに…。小さいじぶたの活躍は小さい子どもたち自身に重ねているようです。

次の日、新聞に載ったじぶたのまわりに、子どもたちが集まってきました。

細かくていねいに描かれた消防自動車の絵が、時代を超えても変わらずに受け入れられているのでしょう。

## こすずめのぼうけん

ルース・エインズワース 作 堀内 誠一 画 石井 桃子 訳  
福音館書店 1977年(こどものとも1976) 20×27cm



飛ぶ練習をしていたこすずめは、うまく飛べたのがうれしくて、ある日、一人で遠くまで飛んできてしまいました。疲れた羽を休めようと、からすの巣のふちに立って、少し休ませてくださいと頼みますが、鳴き声が違うので仲間ではないと、入れてくれません。次にやまばと、そしてふくろう、さらにかもの巣を訪ねてまわりますが、仲間ではないとやはり入れてはもらえません。

日も暮れて、つかれて飛べなくなり心細くなったこすずめ。向うからピョンピョンと近づいてくる姿に、「ぼくはあなたの仲間でしょうか」と尋ねると…。

作者のお話を、日本で絵本にしたものです。

## ぼとんぼとんはなんのおと

神沢 利子 作 平山 英三 絵  
福音館書店 1985年(こどものとも1980) 27×20cm

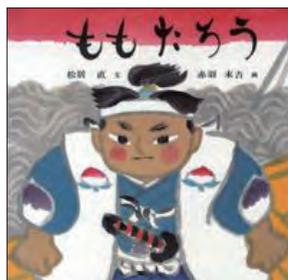


冬ごもりの穴の中、クマのお母さんはふたごのぼうやを産みました。ぼうやたちは、外の世界から聞こえてくるいろいろな音に興味がいっぱい。フクロウや小鳥の声、雪のしずけさやなだれの音、ぼとんぼとんとつららのとける音などを聞いては何の音が尋ねます。お母さんはそのたびに、愛情をこめて教えてやります。

クマの親子の対話や表情が、冬から春へと移りゆく自然を背景に、優しく愛情ゆたかに描かれています。春の音とにおいが心地よく伝わってきます。

## ももたろう

松居 直文 赤羽 末吉 画  
福音館書店 1965年 21×22cm



昔、昔のお話です。おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。ある日、おばあさんは、川上からももが流れてくるのを見つけ、持って帰って、おじいさんと食べようとしめすと、ももは割れて中から可愛い男の子が生まれました。ももたろうと名づけられた男の子は、だんだん大きくなり、一を教えれば十までわかる賢い、その上、力持ちの子に育ちました。ある日、カラスがやってきて、鬼が米や塩を奪い、お姫さまをさらっていったと知らせます。

ももたろうは、日本一のキビ団子を作ってもらい、鬼退治に出かけます。道すがら、キビ団子を貰った犬、さる、キジがお供に加わります。動物たちが仲間になる3回の繰り返し問答や赤羽末吉の力強い絵が印象的です。

日本の昔話です。

## 三びきのこぶた

山田 三郎 画 瀬田 貞二 訳  
福音館書店 1967年 27×20cm



三びきのこぶたの兄弟がいました。一番上のこぶたは藁で家を作り、二番目のこぶたは木の枝で作ったので、やってきたおおかみに吹き飛ばされ、食べられてしまいます。

三番目の子豚はレンガで家を作ったので吹き飛ばされませんでした。おおかみは、なんとかしてこのこぶたを捕まえようとするのですが…。

こぶたがおおかみを食べてしまう、という結末は意外ですが、イギリスの昔話を忠実に再話したこの絵本は、こわいおおかみは、もうこない、という安心感を子どもたちに与えるようです。

## マーシャとくま

M・プラトフ 再話 エウゲニー・M・ラチョフ 絵 内田 莉莎子 訳  
福音館書店 1963年 28×23cm cm



森へでかけたマーシャはお友だちとはぐれ、道に迷ってしまいました。そして、森の奥深くに住んでいる大きなくまにつかまってしまいます。なんとかしてそこを逃げ出そうと、考えて、考えて、マーシャは いいことを 思いつきました。おじいさんとおばあさんへまんじゅうを届けてやる、というくまの「つづら」(蓋付きのかご)の中にこっそり入り込んで…。

「きりかぶに こしかけて、まんじゅうを たべよう！」というくまに、木の上から見張っているはずのマーシャが「みえるわ みえるわ！…」とつづらの中から答える場面は子どもたちが大喜びするところです。

ロシアの昔話です。

## おおかみと七ひきのこやぎ

フェリクス・ホフマン え せた ていじ やく  
福音館書店 1967年《スイス 1957》 22×31cm



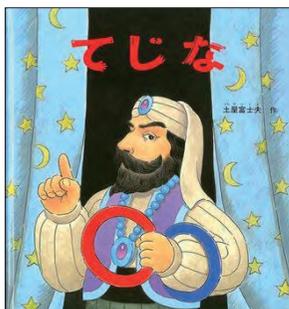
母やぎと七ひきのこやぎとおおかみの物語です。ある日、母やぎが森へ食べ物を探しに行っている間に、おおかみがやってきて、母やぎのふりをしては、何度も家に入ろうとします。こやぎたちはそれを見破るのですが、ずるがしこいおおかみについに食べられてしまいます。悲しみにくれた母やぎと残った一ひきのこやぎは、食べられてしまったこやぎたちを助けようと…。

最小限の彩色で描かれたホフマンの絵は、読者をお話の世界に引き込んでいきます。

絵を見てお話が分かる、永く読み継がれているグリム童話絵本の一冊です。

## てじな

土屋 富士夫 作  
福音館書店 2007年(こどものとも1998) 22×22cm



「さあて、ごらんのとおりの2本の“わ”。まほうのこたばをかけますよ。あんどら、いんどら」とせりふを読みながら「うんどら！」と言ってページをめくると、あらあらふしぎ!“わ”は9本になりました。見ている人は思わず拍手！

さあ、次のページに進みます。

「こんどは たまごに まほうのこたばをかけましょう あんどら いんどら」、「うんどら！」で、卵はぱっと割れてきれいな花に大変身。

まさに「てじな」です。あっと驚く仕掛けを楽しめます。

まほうのこたばは、あ・い・う・から始まる簡単なこたばです。

## とこちゃんはどこ

松岡 享子 作 加古 里子 絵  
福音館書店 1970年 27×20cm



とこちゃんは赤帽子をかぶった元気な男の子です。ある日お母さんと市場にいきましたが、迷子になってしまいます。お母さんが探すように、読者も一緒になって、「とこちゃんはどこ？」と、たくさんの子もたちや売り場など、ページいっぱいには細かく描かれた市場の中から夢中でさがします。動物園や海やお祭り、最後にデパート、家族と行く先々でとこちゃんを探すことになります。

家族が心配する様子や四季折々の遊び、そして暮らしぶりの描写が読者に興味を持たせ、とこちゃん探しを親子で楽しめます。

## ガンピーさんのふなあそび

ジョン・バーニンガム 作 光吉 夏弥 訳  
ほるぷ出版 1976年《イギリス 1976》 26×26cm



川辺の家に住むガンピーさんが小舟で出かけます。途中で、子どもやうさぎ、ねこ、いぬなどの動物たちが次々に、のせてくださいと乗りこんできます。ガンピーさんは、動物たちに、やっではいけないことを言い渡します。はじめは、みんな仲良く乗っていましたが…。

見開き左ページに舟の様子がモノクロで、右ページに次に乗り込む動物が大きくカラーで描かれて、ストーリーが展開していきます。美しく穏やかな風景とガンピーさんのおおらかさが読者をひきつけます。

他に『ガンピーさんのドライブ』(ほるぷ出版)もあります。

ケイト・グリーンナウェイ賞受賞の傑作絵本です。

## くんちゃんのだいらょこう

ドロシー・マリノ 文・絵 石井 桃子 訳  
岩波書店 1986年《イギリス 1961》 27×19cm



ふゆごもりに近いある日、こぐまのくんちゃんは、おとうさんぐま、おかあさんぐまと散歩にでかけます。南の国にとんでいく鳥を見て、自分もわたってみたいくなります。今度は、ひとりで丘の上まで行きます。が、おかあさんにさようならのキスをしてこなかったことを思いだし、家に帰ります。キスをして丘までのぼると、「そうがんきょうがいるな」と、取りに帰ります。次は釣竿…次は…と何度も行き来するうちに、くたびれたくんちゃんは…。

『くんちゃんのはじめてのがっこう』(岩波書店)『くんちゃんのはじめてのキャンプ』(まさきりこ訳・ペンギン社)などシリーズで7冊あります。

## のろまなローラー

小出 正吾 作 山本 忠敬 絵

福音館書店 1967年(こどものとも1965) 20×27cm



道路工事には欠かせないロードローラーですが、ゆっくり走るので、大きなトラックや立派な自動車や小型自動車にばかにされながら追い越されます。ところが、坂道をゆっくり登っていくと、追い越していった3台の自動車がでこぼこ道でパンクし動けなくなっていました。

表情豊かな車の顔は親しみを感じさせます。また、ローラーと車のやりとりを楽しみながら、ローラー車の大事な役目に気づかされます。乗り物好きな子どもたちに読み継がれている絵本です。

## ぐるんぱのようちえん

西内 ミナミ 作 堀内 誠一 絵

福音館書店 1966年(こどものとも1965) 20×27cm



ぐるんぱは、ひとりぼっちでくらししてきたので臭くて汚い象でした。そこで、まわりの象たちは洗ってやり、見違えるほどりっぱにして働きに出します。しかし、ビスケット屋のビーさん、お血作りのさーさん…と、どこにいても大きな物を作ってしまう、やめさせられます。自分で作った物を車に乗せてしょんぼり出していくと、大家族のおかあさんに出会います。子どもたちの遊び相手を頼まれ、ピアノを弾いて歌ってやったり、お血をプールにしてやったり…。

幼稚園を開き、たくさんの園児に囲まれ生き生きしている最後の場面は、子どもたちに安心感と満足感をたっぷり味わわせてくれることでしょう。

## おおきな きが ほしい

佐藤 さとる 文 村上 勉 絵

偕成社 1971年 26×21cm



かおる少年は、大きくて高くて、すてきな「木」を夢見ています。

その木には、てっぺんまで続くいくつものほしごがあります。途中にはほらあなや、一年中お料理や読書をして楽しめる小屋もあります。その上にある見晴らし台に登れば、空の中にいるような気持ちになれるのです。

子どもの頃は、いろいろな夢を見ます。この絵本を読んだ後には、誰もが想像の翼を広げ、自分だけの「大きな木」を描いてみたくなるでしょう。

## どろんこハリー

ジーン・ジオン 文 マーガレット・ブレイ・グレアム 絵 渡辺 茂男 訳  
福音館書店 1964年《アメリカ 1956》 31×22cm



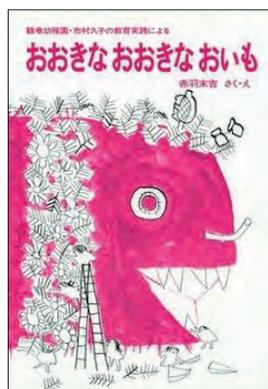
黒いプチのある白い犬のハリーは、お風呂に入ることだけは嫌いでした。ある日、お風呂にお湯を入れる音が聞こえてきたので、外へぬけだして町の工場の空き地や原っぱに遊びに行きました。そして、ハリーは真っ黒に汚れて、家に帰ってきます。ところが、家族にハリーだと気づいてもらえません。自分だと気がついてもらおうと、ハリーは今まで家でやっていたいろいろな芸を必死でやって見せますが…。

苦手なことから逃げ出そうとする気持ち、自分を分かってもらおうと努力する姿がユーモラスに楽しめます。

他に『うみべのハリー』『ハリーのセーター』(福音館書店)、『はちうえはぼくにまかせて』(ペンギン社)があります。

## おおきなおおきなおいも

赤羽 末吉 さく・え (市村 久子 原案)  
福音館書店 1972年 22×16cm



ここは、あおぞら幼稚園。子どもたちが楽しみにしていたいも掘り遠足が、雨で延期になりました。子どもたちは、かさをさして長ぐつで行くと、言い張ります。でも先生のお話を聞いて、おいもは掘らないでそのままにして待っていると、その間、日ごとに大きくなることを知り、かわりに、紙に絵具でおいもを描き始めます。どんどん どんどん…紙をつなげて、大きな大きなおいものできあがり。そこから子どもたちの想像がふくらんで…。

幼稚園・保育園・小学校の子どもたちの体験ともつながり、お話の中でたっぷり楽しむことができることでしょう。

## ちよっとだけ

瀧村 有子 文 鈴木 永子 絵  
福音館書店 2007年(こどものとも2005) 27×20cm



なっちゃんのおうちにあかちゃんがやってきました。手をつないでほしいときなっちゃんはスカートをちよっとだけつかんで歩きます。冷蔵庫の牛乳をとるときも、おきがえも、かみを結ぶ時も、プランコをこぐときも、なっちゃんはママを気づかい、あかちゃんを気づかいながら、けなげにがんばってちよっとだけ成功するのです。きょうだいができてうれしい反面、お母さんがあかちゃんの世話に忙しく、少しさみしい思いをしながら成長する女の子。

最後に、女の子が「ちよっとだけだっこして」というと「いっぱいだっこしたいんだけどいいですか」とお母さん。粋なはからいにぐっときます。

## はじめてのおつかい

筒井 頼子 作 林 明子 絵

福音館書店 1977年(こどものとも1976) 20×27cm



おかあさんに頼まれて、みいちゃんは、初めてひとりでお買い物にいきます。お金をぎゅとにぎりしめてお店までいきますが、途中自転車に追い越されたり、転んでしまったり、ようやくお店にたどり着きます。が、大きな声が出ません。

でもようやく、勇気を出して「ください」と言えた時、涙がぼとりと落ちてしまいました。

そして、待っているお母さんの元へ…。

買った時の達成感、満足感を通して、みいちゃんの成長を感じさせる絵本です。

## いたずらきかんしゃちゅうちゅう

バージニア・リー・バートン 文・絵 村岡 花子 訳

福音館書店 1961年《アメリカ 1937》 32×24cm



ちゅうちゅうは真っ黒でぴかぴか光っていて、きれいな可愛い小さな機関車です。機関士のジムや車掌さんたちにとっても大事にされていました。ちゅうちゅうは、客車や貨車を引いて、小さな町の小さな駅から大きな町の大きな駅へ歩いていき、また戻ってきます。

ある日、ちゅうちゅうはひとりで走ってみようと考え線路に立ち、おもいっきりスピードを出して走りだしました。勢い余ってとうとう止まることができなくなり、とんでもないことになっていきます。

大型画面にモノトーンの画面はとても迫力があり躍動感にあふれています。本書は、バートンが長男のために心を込めて描いたものです。

## ぞうのババール こどものころのおはなし

ジャン・ド・ブリュノフ 作 矢川 澄子 訳

評論社 1974年《フランス 1931》 28×21cm



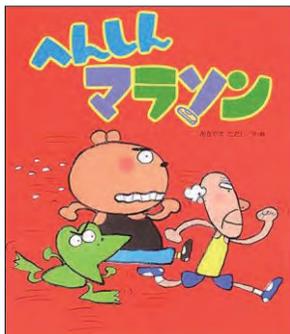
ぞうのババールは大きな森でお母さんと暮らしていましたが、ある日お母さんが鉄砲で撃たれ、死んでしまいます。ババールは何日も走り、大きな町にたどりつきます。そこでゾウの気持ちのわかる優しいおばあさんに出会い、一緒に暮らすことになりました。ババールは幸せでしたが故郷の森のことを思い出し、帰ることにしました。いろいろなことに出会い、心身ともに成長し、ババールはゾウの国の王さまになります。

ユーモラスな暖かみのある絵とババールの身に起こる出来事が読者の子どもたちの心を引きつけ、生きる力やうれしさが伝わる作品です。

『おうさまババール』(評論社)などシリーズ作品になっています。

## へんしんマラソン

あきやま ただし 作・絵  
金の星社 2005年 25×22cm



このマラソン大会で走ると、へんしんしてしまうのです。バネが走ると、なつとうにへんしん、なおとくんが走るとおとなにへんしん、…と走った人が次々にへんしんしていきます。さて、ゆうしょうしたのは、だあれ？(しょうゆ)

ある言葉を何度もくりかえして声に出して読むとその謎がとけます。聞いている人もいっしょに声を出して楽しめる絵本です。

他に『へんしんトンネル』『へんしんおんせん』(金の星社)などへんしんシリーズが多数あります。『たまごにいちちゃん』(鈴木出版)などもあります。

## いいからいいから

長谷川 義史 作  
絵本館 2006年 27×21cm



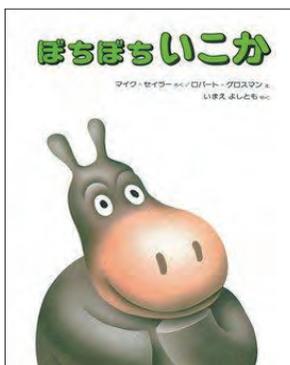
ある日の夕方、かみなりがゴロゴロなりぴかっと光って、気が付くと目の前にかみなりの親子が現れるところからお話は始まります。おじいちゃんのかみなりの親子に、ゆっくりしていくように言ったり、ご飯を用意したり、お風呂で背中をながしたり。そのつど遠慮するかみなりに「いいから、いいから。」と声をかけます。次の日、おじいちゃんとおぼくのおへそがたいへん。でも大丈夫…。

なにがあっても「いいから、いいから。」と楽しんじゃうおじいちゃん。絵と共にユーモアにあふれ、心なごむ絵本です。4冊シリーズです。

他に『やまださんちのてんきよほう』『だじゃれ日本一周』(絵本館)『おじいちゃんのごらくごらく』(鈴木出版)など多数あります。日本絵本賞など受賞。

## ぼちぼちいこか

マイク・セイラー 作 ロバート・グロスマン 絵 今江 祥智 訳  
偕成社 1985年《アメリカ 1975》 26×21cm



のんびり、おっとりのかば君がいろいろなお仕事にチャレンジします。船乗り、飛行士、ピアニスト、次々に新しい仕事に挑みますが、いつもずっこけて失敗ばかり。でもへこたれず、一休みして「ぼちぼちいこか」と自分流に挑戦します。

関西弁の翻訳とユーモラスな姿や行動が、失敗しても落ち込まず、自分を見つめ、あせらずゆっくりやっていこうというメッセージを伝えてくれます。そして、元気と勇気を与えてくれます。

「ミニ版ぼちぼちいこか」も発行されています。

## つきよのかいじゅう

長 新太 さく

佼成出版社 1990年 29×24cm



山の奥の深い湖で、かいじゅうが出てくるのを10年も待ち続けている男がいました。ある夜、ついに一部分が見えてきました。男は夢中で写真を撮りながら、こんなかな、あんなかなとドキドキして想像をめぐらします。かいじゅうがぐーんと大きくなり、ポコポコ ポコポコ ポンと出てきますが…。

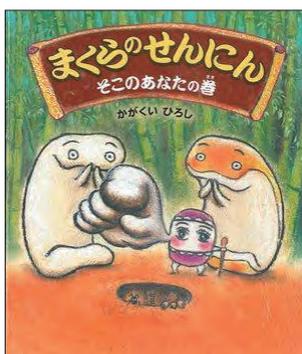
ふしぎ？へんだぞ？と頭の中をくすぐられるような、おもしろさがある絵本です。

他に『キャベツくん』(文研出版)があります。キャベツくんとブタヤマさんが広い野原の真ん中でくり広げる「ぼくをたべるとこうなる」「ぶきゅー」の展開が大うけです。『ブタヤマさんたらブタヤマさん』(文研出版)もあります。

## まくらのせんになん そこのあなたの巻

かがくい ひろし 作

佼成出版社 2010年 25×22cm



まくらのせんになんが、おとものしきさん、かけさんと、散歩をしていると、ぞうが穴に鼻をつっこんでもがいています。すると、また隣できりんが穴に首を突っ込んで抜けなくなっています。うさぎも、たこも同じように、そこで穴をしみじみ見つめていたまくらのせんになんまでも、もぐらやみみずやありに助けを求めるのですが…。そこでまくらのせんになんは、意外なことをそこのあなた(読者)に頼むのです。読者参加型のユーモアたっぷりの絵本です。

他に『だるまさんが』『だるまさんと』『だるまさんの』(ブロンズ新書)『おもちのきもち』『はつきよい畑場所』(講談社)などがあります。

## なぞなぞえほん 1 のまき

中川 李枝子 さく 山脇 百合子 え

福音館書店 1988年 13×13cm



子どもたちは、なぞなぞが大好きです。「きょうのごちそう なにかしら みないで あてる あなが ふたつの めいたんてい」(鼻のことです)など、特に初めてなぞなぞに出会う子どもにぴったりの絵本です。なぞなぞは、言葉のもつイメージをふくらませてくれる楽しい遊びです。子どもの身近にあるもので、幼い子にもよくわかるなぞなぞです。見開きの右ページに問いかけ、左ページに答えになるヒントがあります。リズムのあるゆかいな言葉と「ぐりとぐら」などの絵本の登場人物が出てくる手のひらサイズの小型本です。家族で楽しみたい絵本です。

『なぞなぞのえほん』は3巻シリーズです。

## おかえし

村山 佳子 さく 織茂 恭子 え

福音館書店 1985年(こどものとも1985) 20×27cm



ある日、たぬきの家のとなりへきつねが引っ越してきました。引っ越しのあいさつに、きつねの奥さんからカゴいっぱいのお菓子をもらったたぬきの奥さんは、「おかえし」にたけのこを持っていきます。するとまた今度はきつねの奥さんが、おかえしのおかえしの品をたぬきの家に持ってきて…。

決まり文句の繰り返しとともにどんどん相手の家に移っていく「おかえし」の品々。気がつけば、あらあら…この家は…？

2軒の家の中が、見開きページの左右にカラフルに描かれています。

## めっきらもっきらどおんどん

長谷川 摂子 作 降矢 奈々 画

福音館書店 1990年(こどものとも1985) 20×27cm



ある夏の日、遊ぶ友だちのいないかんたは、「ちんぷく まんぷく あつべらこの きんぴらこ じょんがら びこたこ めっきらもっきら どおんどん」と、お宮でめちゃくちゃな歌を歌います。すると、それにこたえる声がします。声のする穴をのぞきこむと穴の中に引っ張り込まれました。そこにはへんでこな3人のお化けがいて、一緒に遊ぼうと言います。

遊び疲れたかんたは、急にさみしくなり「お・か・あ……」と叫びますと…。

個性的なお化けの魅力に、子どもたちは絵本の中に吸い込まれ、遊び心がかきたてられます。動きのある色鮮やかな画風が面白さをひきたてています。

他に『きょだいなきょだいな』(福音館書店)があります。

## アンガスとあひる

マージョリー・フラック 作・絵 瀬田 貞二 訳

福音館書店 1974年《アメリカ 1930》 18×26cm



子犬のアンガスは、何でも知りたがり、好奇心いっぱい、自分で確かめなければ気がすみません。生垣の向こうから聞こえてくる「ガー、ガー、ゲーック、ガー！」という音が知りたくてたまりません。ある日、ドアが開けばなしになっていたので、家を抜け出し垣根をくぐり抜けると、アンガスが初めてみる2ひきのアヒルがいました。アンガスは、うなったり吠えたりしてやっつけるつもりが、逆にあひるに追いかけて、必死で逃げ帰り、家のソファの下にもぐり込みます。

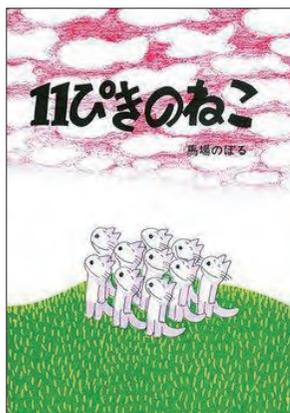
子犬の表情が生き生きと描かれた古典絵本です。

他に『アンガスとねこ』(福音館書店)があります。

## 11匹きのねこ

馬場 のぼる 作

こぐま社 1967年 27×19cm



いつもおなかをすかせている11匹ののらねこがいました。ある日、怪物のように大きな魚がいることを聞いて山の向こうの湖に出かけていきます。いかだを作って湖に乗り出し、やっと大きな魚を見つけます。大格闘の末ようやく魚を捕まえます。そして捕まえた魚を夜どおいしいかだにつないでおくことにし、絶対に食べない約束をしますが、一夜明けると骨だけの魚とパンパンにふくれあがったねこたちのおなか…。

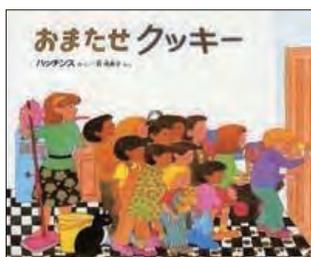
なんともとぼけた味があり、子どもが大好きな絵本です。

「11匹きのねこ」のシリーズは全6冊です。

## おまたせクッキー

パット・ハッチンス 作 乾 侑美子 訳

偕成社 1979年《アメリカ 1986》 21×26cm



おかあさんが焼いてくれた12枚のクッキーを、ヴィクトリアとサムが食べようとした時、玄関のベルが「ピンポン」となり、お友だちが2人入ってきます。それで4人で食べようとする、また玄関のベルがなり、お友だちが2人やってきます。食べようとするたびに玄関のベルがなり、いつになったらクッキーを…。

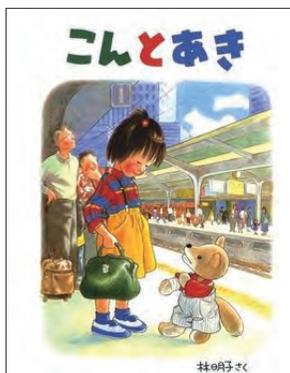
繰り返しのやりとりと、「ピンポン」となるたびにはらはらす子どもたち。でも、最後はちゃんと満足できることが起きます。

色とりどりの洋服を着た子どもたちや、部屋の様子が変わっていくのも、見て楽しい絵本です。

## こんとあき

林 明子 作

福音館書店 1989年 28×22cm



“こん”は、おばあちゃんが作ったきつねのぬいぐるみです。“あき”が赤ちゃんのころ砂丘町からやってきました。ある日、“こん”の腕がほころびてしまったので、直してもらうために、ふたりはおばあちゃんの家まで旅をします。旅の途中で次々と起こるハプニングに巻きこまれながらも、やっとのことでおばあちゃんの家にとどりつき、“こん”はきれいに直してもらうことができました。

ふたりの心の交流とあきの成長が、明るい色使いで描かれ、自分の成長と比べたり重ねたりしながら、温かい気持ちになれる作品です。

## ピーターラビットのおはなし

ビアトリクス・ポター 作・絵 石井 桃子 訳

福音館書店 2002年《イギリス 1902》 15×11cm



こうさぎのピーターはお母さんや妹たちと木の下の中の穴の中に住んでいました。お父さんがパイにされたマクレガーさんの畑には、ぜったい行ってはいけませんというおかあさんのいいつけを守らず、ピーターは畑にもぐりこみます。野菜を次々に食べ、とうとう見つかってしまいます。必死で逃げ回りますが洋服があまりにひっかかってしまい…。

大人の手に収まるサイズで、見開きごとに優しいタッチの絵と丁寧な描写やユーモアあふれる文章で、お話が繰り広げられています。シリーズは全部で26冊でています。

『こわいわるいうさぎのおはなし』(福音館書店)などがあります。

## 100まんびきのねこ

ワnda・ガアグ 文・絵 石井 桃子 訳

福音館書店 1961年《アメリカ 1928》 20×27cm



子どものないことを寂しがるおばあさんのために、おじいさんは、ねこを探しに出かけました。日のあたる丘を越え、涼しい谷間を通って行くと、ねこでいっぱいのはなについたのです。いちばんきれいなねこを選ぼうとしますが、どれもかわいくて、とうとう、1びきのねこを探しに行ったのに、そこにいるねこをみんな連れて帰ることに…。

「ひゃっぴきのねこ、せんびきのねこ、いちまんびきのねこ…」と繰り返される言葉がリズムカルで快く響きます。素朴で温かい古典的絵本です。

見開きいっぱいに絵を描くというページ構成の先駆けとなった絵本です。

## あくたれラルフ

ジャック・ガントス 作 ニコール・ルーベル 絵 石井 桃子 訳

童話館出版 1994年《アメリカ 1976》 22×24cm



女の子セイラの家のあくたれねこのラルフは、ブランコの木を切ってしまったり、お父さんの椅子に座ったり、自転車ごとテーブルにとびこんだり、小鳥を追いかけ回したり、いたずらのし放題です。

家族で見に行ったらサーカスでも大暴れです。罰として、サーカスにおいていかれて、こき使われ苦勞して逃げ出します。探しに来たセイラに連れ戻され、ラルフは二度と悪たれはしまいと思うのですが…。

人間と猫の心温まるお話で、絵も鮮やかでとても楽しいです。

## だってだてのおばあさん

佐野 洋子 作

フレーベル館 1975年 27×22cm



ある家に98歳のおばあさんとねこが住んでいました。おばあさんが99歳のお誕生日に、ねこはろうそくを買いに行きます。あんまり急いのでろうそくを川に落としてしまい、5本だけ持って帰ってきます。おばあさんはがっかりしますが、ケーキの上の5本のろうそくを数えているうちに5歳になった気分になります。次の朝「だってわたしは5さいだもの…」とねこと一緒に魚釣りに出かけ、「5さいってなんだかとりみたい」と94年ぶりに川をとびこえ、魚もたくさんとりました。気持ちの持ち方でハツラツと元気に生きることができると教えてくれる一冊です。丸みをおびたクレヨン画は暖かくこのお話にぴったりです。

## ふしぎなたいこ

石井 桃子 文 清水 崑 絵

岩波書店 1953年 17×20cm



げんごろうさんは、ふしぎなたいこを持っていました。そのたいこをたたいて、人の鼻を高くしたり低くしたりして喜ばれていました。あるとき、げんごろうさんは自分の鼻はどのくらい伸びるかためしてみたくまりました。たいこをたたき続けると鼻は木よりも山よりも高くなり、とうとう白い雲の中まで伸びていきました。その時、天の国の大工さんが、げんごろうさんの鼻を棒と間違えて、橋のらんかんに結びつけてしまったから大変です。鼻を縮めようとする、今度は自分が宙に浮いてしまいます。

鼻が伸びていく様子がユーモラスに描かれている親しみやすい絵本です。

## ふしぎなたけのこ

松野 正子 さく 瀬川 康男 え

福音館書店 1966年(こどものとも1963) 20×27cm



タロは、たけのこ掘りに出かけました。上着をとなりの“たけのこ”に引っ掛けました。すると“たけのこ”がぐんぐんのび、慌てて飛びつくと、止まるどころかタロを乗せてどんどん伸びていき、タロはとてつもなく高い所まで上がって行ってしまいました。

村中総出で巨大な“たけのこ”をオノで切り倒し、倒れた先に見えたのは？…。おかげで山奥の村はいつまでも栄えたというお話です。

横版の絵本ですが、竹の子が伸びる場面だけ、絵本を縦長に持って見るように描かれていて、巨大に伸びていく様子が迫力満点です。山奥の色彩や村人の表情などお話の雰囲気（きんぐう）を盛り上げています。

他に『ごぎつねコンとこだぬきポン』（童心社）があります。

## おしゃべりなたまごやき

寺村 輝夫 作 長 新太 画  
福音館書店 1972年 26×27cm



この国の王さまは卵焼きがだいすきです。ある日、王さまは、小屋にぎゅうぎゅうづめになっているにわとりを見て可哀想に思い、鍵を開けてしまい大騒ぎになりました。兵隊たちは鍵を開けた犯人をさがしますが、みつかるはずがありません。王さまは自分が鍵を捨てたところを見ていたにわとりが一羽いたことに気づき、そのにわとり「だれにもいうなよ」と念をおします。

ところが、そのにわとりが産んだ卵で作った卵焼きがしゃべりだし…。  
長新太のユーモラスな絵が、おはなしをいっそう楽しくさせてくれます。  
姉妹編『ぞうのたまごのたまごやき』(福音館書店)があります。

## すてきな三にんぐみ

トミー・アングラー 作 今江 祥智 訳  
偕成社 1969年《アメリカ 1962》 30×22cm



闇夜にまぎれて金銀財宝をねらう、黒マントに黒ぼうしのどろぼう三人組。おどしの手口もあざやかに、宝をたくさん集めていました。

でも、ある晩さらって来た、みなしごのティファニーちゃんに「宝のつかい道」を聞かれて、すっかり考え込んでしまいます。

恐ろしいどろぼうだと思った三人組が、子どもを助ける3人組に変身し…。  
ユーモラスで心温まる絵本です。



### 絵本と紙芝居は車の両輪です

絵本は読者が本の中に入っていく、自分という個の存在（周りを意識しなくなっていく）で、作家の心の世界に入っていきます。

作家から生きることの意味と素敵さをもらい、主人公によりそいながら大事なものをもらうことによって個の感性が育てられていくのです。

それに対し、紙芝居は（演じ手により）作家の世界が現実の空間に出ていきひろがる中で周りの人との共感が生まれ、演じ手と聞き手が“表情しあう”ことと“間”によるコミュニケーションを通すことによって共感の感性が育てられていきます。

絵本と紙芝居は“大事なこと”の渡し方が違う、車の両輪です。

【絵本作家まついのりこ(愛川町子どもの読書を推進する会主催講演会より)】

※本書では、ページ数の関係から、紙芝居はとりあげられませんでした。



## せんたくかあちゃん

さとう わきこ 作・絵

福音館書店 1982年(こどものとも1978) 20×27cm



力強くてどっしりとした、本当に“かあちゃん”という呼び方がぴったりの主人公は、洗濯が大好き。家族の洋服だけでは飽き足らず家の中にある物や子どもたちや動物たちまで、ゴシゴシ洗ってしまいます。

おへそを取りに来たかみなりさままでつかまえて、ゴシゴシゴシ。すると目も鼻も口も消えてしまったので、子どもたちが顔を描いてあげるととてもいい男に。翌日たくさんのかみなりさまがいい男にして欲しいとやってきて…。

たくましいかあちゃんと画面を埋めつくすかみなりさまがユーモアと迫力にあふれています。

他に“ばばあちゃん”を主人公にした『あめふり』『いそがしいよる』『おつかい』（福音館書店）などがあります。

## ひとあし ひとあし -なんでもはかれるしゃくとりむしのはなし-

レオ・レオニ 作 谷川 俊太郎 訳

好学社 1975年《アメリカ 1960》 28×22cm



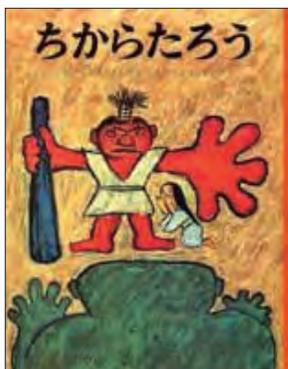
はらぺこのこまどりに食べられそうになったしゃくとりむしは、「たべないでくれよ。ぼく いろんなもののがさをはかるんだ。べりりなんだよ」と、こまどりのしっぽの長さを測って喜ばれ、ほかの鳥たちの首や足を測ります。あるとき、ナイチンゲールの美しい声を測るように言われ、困ったしゃくとりむしは…。

自然の美しい色合いに、心と目が癒される、長く語り継がれている絵本です。他に『スイミー』『フレデリック』『あいうえおのき』（好学社）などがあります。

## ちからたろう

今江 祥智 文 田島 征三 絵

ポプラ社 1967年 27×21cm



おじいさんとおばあさんのこんび(体のあか)で作った人形に、まんまをあげると、いきなり手を伸ばしぱくんと食べはじめました。どんどん食べて大きくなりましたが、何年たってもねたままでした。ある日、百貫目のかな棒をつくってもらおうと、それをつえにして立ち上がりました。ちからたろうは、自分の力がどのくらい役に立つのか、ためすため旅に出ました。途中で会った「みどうっこたろう」と「いしこたろう」と3人で、のっし じゃんが ずしん、のっし じゃんが ずしんと歩いていき、大きな町の娘をばけものから助けます。

田島征三の力強い絵とリズムカルな文章が心地よい絵本です。

## いっすんぼうし

石井 桃子 文 秋野 不矩 絵  
福音館書店 1965年 21×22cm



こどものいないおじいさんとおばあさんが、おてんとうさまにお願いすると、親指くらいの男の子をさずかりました。一寸法師と名付けて育てましたが、いくつになってもからだは大きくなりません。おわんを舟に、箸を櫂に、針を刀にして都へ上り、大臣のおやしきではたらくことになります。悪い鬼どもに襲われたひめを助け、打ち出の小槌を手に入れます。

ていねいな文章とやさしい絵で子どもたちも大人もお話しの世界に引き込まれていきます。

日本の昔話です。

## かさじぞう

瀬田 貞二 再話 赤羽 末吉 絵  
福音館書店 1966年(こどものとも1961) 27×19cm



「むかし、あるところに、びんぼうな じいさんと、ばあさんと あったと。」じいさんは毎日、あみがさを作り、それを売って暮らしていました。ある大晦日、かさを売りに町へ行きますが一つも売れません。ふりしきる雪の中、ふぶきにさらされている穴地藏さまを見てかわいそうに思ったじいさんは、持っていたかさと自分のかさをかぶせて家に帰りました。すると次の朝早く、穴地藏さまのそりひきの声がしたので、じいさんが雨戸を開けてみると…。

温もりのある語り口、和紙の上に墨と部分彩色で描かれた絵が心地よい世界へ誘ってくれます。なお、この作品は赤羽末吉が初めて描いた絵本です。

日本の昔話です。

## かにむかし

木下 順二 文 清水 崑 絵  
岩波書店 1976年 16×21cm



かにが、柿の種を蒔きました。大事に大事に育てると、やがて真っ赤な実がたくさん実ります。山からやってきて木に登ったさるに青柿をぶつけられ、かにはぺしゃんこになってしまいました。つぶれた甲羅の下から「ずぐずぐずぐずぐず」とはだしてきたかにの子どもたちは「さるのばんばへ あだうちに」とでかけます。途中で出会った、くり、はち、うしのふん、ぼう、石うすをお供に連れて。そして、作戦をたてて皆でさるを待っていると…。

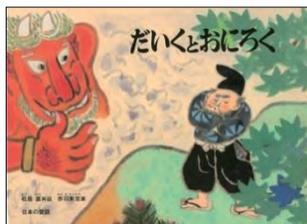
独特の言い回しや繰り返しのことは、ユーモアのある絵が、お話をさらに楽しくしてくれます。

日本の昔話です。

## だいくとおにろく

松居 直 再話 赤羽 末吉 画

福音館書店 1967年(こどものとも1962) 20×27cm



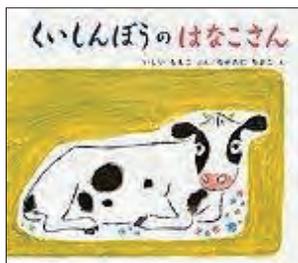
昔、流れの早い大きな川があって、何度橋を架けても流されてしまいました。村の人は困り、腕のいい大工に工事をお願いしました。大工が、本当に作れるのか心配になって川を見て考えていると、川の中から大きな鬼が現れ、目玉をよこせばかわりに橋を架けてやろうと言います。大工がいいかげんな返事をしていううちに、橋は立派にできあがり、鬼は目玉をよこせと迫ってきます。あわてて逃げ出す大工に、鬼は自分の名前を当てれば許してやると言いますが…。

鬼と大工の知恵くらべやユーモラスなやりとり、昔話特有のテンポの良い語り口調が楽しい絵本です。

## くいしんぼうのはなこさん

いしい ももこ 文 なかたに ちよこ 絵

福音館書店 1965年 21×24cm



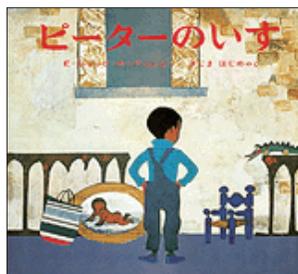
わがままな子牛のはなこは、ある日、たくさんの牛たちがいる山の牧場に連れて行かれます。お百姓はこれでわがままなおるだろうと思ったのですが、他の小牛たちを負かし、女王になってますますわがまになるばかり。

ある日、欲張ってサツマイモとカボチャをひとりじめにして食べたものですから、はなこのおなかはアドバルーンのようにふくらんでしまいます。獣医さんに太い注射をされ、すっかりこりてしまうまでが明るくユーモラスに語られています。はなことまわりの小牛たちはまるで子ども社会の縮図のようです。絵は色が美しく山の牧場がさわやかに描かれています。

## ピーターのいす

エズラ・ジャック・キーツ 作・画 木島 始 訳

偕成社 1969年《アメリカ 1967》 21×24cm



妹のスージーが生まれ、ピーターが赤ちゃんの時に使っていた、ゆりかごやベッドがピンクに塗り替えられてしまいました。まだ塗り替えられていない小さいすだけは守ろうと、ピーターはいすを持って犬と一緒に家出します。けれども、大きくなったピーターは、もうその小さいすには座れません。そと家に帰り、お母さんに見つけてもらい、お父さんのそばで大人のいすに座ったピーターは…。

きょうだいのできた嬉しさの裏で、寂しさを感じる子どもの気持ちと、成長が、キーツ独特のコラージュの技法(貼り絵)で描かれています。

他に『ピーターのくちぶえ』『ゆきのひ』(偕成社)などがあります。

## まほうつかいのノナばあさん

トミー・デ・パオラ 文・画 ゆあさ ふみえ 訳  
 ほるぷ出版 1978年《アメリカ 1975》 28×26cm



昔むかしのカラブリアの町。ここに困っている人たちを助けてあげる心優しい魔法使いのノナばあさんが住んでいました。

呪文を唱えるとスパゲティが出てくる魔法の釜をもっています。

ある時、うっかりやのお手伝いアンソニーが魔法の釜の呪文を聞いてしまったことからあら大変！町中が大騒ぎに…。

大騒ぎの様子やおはなしの行方にハラハラドキドキの絵本です。

古くからイタリアに伝わるおはなしをトミー・デ・パオラが再話、そしてストーリーにぴったりのあたたかな絵も描き素敵な作品になりました。

他に『ヘルガの持参金』(ほるぷ出版)があります。

## あのね、サンタの国ではね

松本 智年・一色 恭子 原案 嘉納 純子 文 黒井 健 絵  
 偕成社 1990年 21×27cm



サンタの国には、のっぼのサンタ、やせっぽちのサンタ、色黒サンタなど、大勢のサンタが仲良く暮らしています。

クリスマスの時には、世界中のよい子にプレゼントを届けるサンタたち。

でも、クリスマスじゃない時って、サンタたちはなにをしているのでしょうか？

「そうなんだ～」と言いたくなるような、楽しそうで充実した彼らの一年間が、黒井健の絵で月ごとに描かれています。不思議のバールに包まれたサンタが、ちょっぴり身近に感じられるかも知れませんね。

子どもたちに夢を伝えてあげられる一冊です。

## ありこのおつかい

石井 桃子 作 中川 宗弥 絵  
 福音館書店 1968年 28×22cm



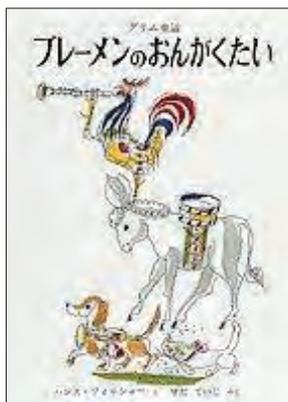
ありこのありこは、お使いの途中で道草を食ったばかりに、かまきりに丸ごと飲みこまれてしまいます。お腹の中でありこは「ばかあ！」と抗議します。次にむくどりに会いますが、むくどりは、かまきりのお腹の中から「ばかあ！」という声を聞き、怒ってかまきりを飲みこみ、その後、むくどりがやまねこに、やまねこが熊の子に、次々に飲みこまれていきます。

熊の子が家に帰ると、お腹の中でありこたちがさわいだので、熊の子のお母さんは…。

動物たちのやりとりがリズムカルに進み、そのたびに体が一回り大きくなっていくのが目に見えるように分かる、ゆかいな絵本です。

## ブレーメンのおんがくたい

ハンス・フィッシャー 絵 瀬田 貞二 訳  
福音館書店 1964年《スイス 1948》 31×22cm



年老いてやっかいものにされたロバ、犬、猫、おんどりが出会い、音楽隊に入ろうとブレーメンへ向かいます。途中、灯りが見えるところをのぞくと泥棒たちがごちそうを食べています。そこで、ロバ、犬、猫、おんどりと次々にその背中に乗って、いっせいに、ひんひん、わんわん、にゃあにゃあ、こけこっこうと叫びながら、窓からなだれこみました。泥棒たちは驚いて逃げて行き、ごちそうにありつきます…。

フィッシャーの生き生きとした線画が動物たちの表情や様子を巧みにとらえ、気持ちやお話の内容がいっそう伝わってきます。

グリム童話のひとつです。

## ねえ、どれがいい？

ジョン・バーニンガム 作 まつかわ まゆみ 訳  
評論社 1983年《イギリス 1978》 31×27cm



「もしもだよ、きみんちのまわりがかわるとしたら、大水と、大雪と、ジャングルとねえ、どれがいい？」「おしろで食事、気球で朝ごはん、川でおやつ？ねえ、どれがいい？」とページごとに問いかけるスタイルです。「へびにまかれるのと、さかなにのまれるのと、わにに食べられるのとさいにつぶされるのとどれがいい？」など、奇想天外な三者択一や四者択一の問いかけに、おもわず笑ったり、迷ったり、とまどったりしてしまいます。最後まで大いに楽しめる読者参加型のユーモアたっぷりの絵本です。

ジョン・バーニンガムの淡い色彩とやわらかい線の絵は、表情豊かで臨場感にあふれています。

## うさぎのみみはなぜながい

北川 民次 文・絵  
福音館書店 1962年 31×22cm



山のうさぎは、森じゅうのけものをおつくりになった神さまに、自分をもっと大きくして欲しいとお願いをしに行きました。神さまは「とらと、わにと、さるの皮を持ってきたら、かなえてやろう」と言われました。うさぎは知恵をしばり、3びきの皮を神さまに差し出しましたが、神さまは、おまえの願いをみんなさきとどけてやるわけにはいかぬと、ひとつだけかなえてあげました。

力強い絵と、しっかりとしたストーリーで描かれています。

メキシコの民話です。

## ねむりひめ

フェリクス・ホフマン 絵 瀬田 貞二 訳  
福音館書店 1963年《スイス 1959》 31×22cm



王さまは、女の子が生まれたお祝いの宴会に12人の占い女を招きました。彼女らはそれぞれに贈り物をします。しかし、ひとりだけ招かれなかった13ばんめの占い女が現れ、「ひめは、15になったら、紡錘にさされて、たおれてしぬぞ!」と言い残して帰って行きます。まだ贈り物をしていなかった占い女がかるうじて“100年の間眠りにつく”と予言を変えてくれました。その予言どおり、紡錘をさした姫は、深い眠りにつきます。王さまも、お妃も、けらいも、馬も、犬も鳩も…すべてが眠りにつきました。お城はいばらにつつまれ見えなくなっていました。

グリム童話の中でも、世界的に有名な話です。何もかもが静かに眠り続ける世界を、落ち着いた色合いで、スイスの画家ホフマンが繊細に描いています。

## ガラスめだまときんのつのがヤギ

スズキ コージ 画 田中 かな子 訳  
福音館書店 1988年(こどものとも1985) 22×31cm



おばあさんは畑をたがやして麦をまきました。大きく育った麦畑へヤギがきて大暴れます。おばあさんが追い出そうとしましたが、ヤギはでていきません。困っているおばあさんを助けようと動物たちが次々と来てくれますが、ヤギの「おいらにや、ガラスめだまと、きんのつのがある。ひとつきすれば、いちころさ!」という言葉で動物たちは逃げていってしまいます。

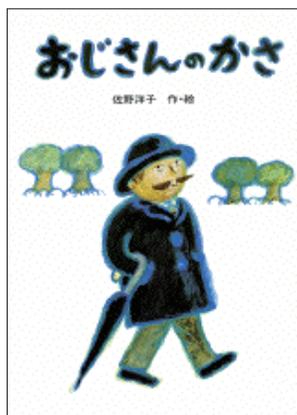
繰り返しの問答の末、最後にヤギを追い出すのは…。

貼り絵を生かした、色鮮やかなスズキコージの絵本です。

ベラルーシ(旧白ロシア)の民話です。

## おじさんのかさ

佐野 洋子 文・絵  
講談社 1992年 31×22cm



おじさんのかさは、おじさんにとって大事な大事なかさです。雨が降ってもさしません。「かさがぬれるからです」。

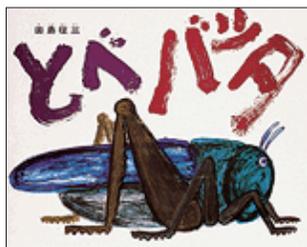
ある時、おじさんが雨宿りをしていると、小さな男の子がやってきて、かさに入れて欲しいというのですが、聞こえないふりをします。そこへかさをさした小さな女の子がやってきて、「雨がふったらポンポロリン、雨がふったらピッチャンチャン!」と一緒に歌いながら帰る二人を見て、本当にそんな音ができるのか、おじさんは確かめたくまりました…。

おじさんの姿と立派なかさの絵がマッチし、雨音の擬音による表現がリズムカルでつい口ずさんでしまいたくなります。

## とべ バッタ

田島 征三 作

偕成社 1988年 24×30cm



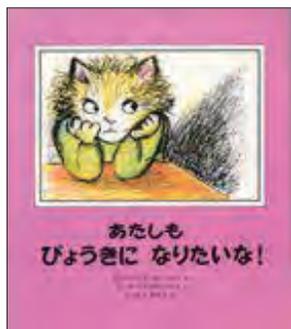
小さなバッタは恐ろしい天敵から身を守るため、毎日毎日びくびくしながら、小さな茂みに隠れ住んでいました。でも、おびえながら生きていくのがつくづくいやになり、ある日、堂々と生きようと決意します。へびにねらわれたり、カマキリに襲われたりしますが、敵を次々と打ち倒しながら、自分に備わっていた羽という大きな力を発見します。そして、大空に羽ばたき、自分の人生を、勇気を持って進んでいきます。

何といっても力強い迫力のある絵に引きつけられます。また、言葉の強さ、淡々とした文は、読むたびに力を与えてくれます。

## あたしもびょうきになりたいな！

フランツ・ブランデンベルク 作 ふくもと ゆみこ 訳

偕成社 1983年《アメリカ 1976》 24×21cm



子猫のきょうだいのお話です。エドワードが病気になりました。おかあさんがベットに食事を運び、おとうさんが冷たいタオルを当て、おばあちゃんに本を読んでもらって、エドワードがみんなに大事にされている様子を見て、エリザベスはうらやましくてたまりません。思わず「あたしもびょうきになりたいな！」。

ところが、本当に自分が病気になってみると、今度は元気で何でもできるエドワードがうらやましくなります。

うらやましがりの幼児の気持ちを描いた親しみやすい雰囲気（きんぎょ）の絵本です。

## あさえとちいさいもうと

筒井 頼子 さく 林 明子 え

福音館書店 1982年（こどものとも1979） 20×27cm



あさえには小さい妹がいます。お母さんに留守番をたのまれたあさえは、妹を喜ばせようと靴を履かせ手を引いて外へ出て遊びます。

妹の手は柔らかくとても小さくて、あさえは自分がずんと背が伸びて大きくなったような気持ちになりました。道路に絵を描いて遊び、長い線路や駅やトンネルも夢中で描き続けていました。気がつくと妹がいません。慌てて探します。向こうの道路から自転車の急ブレーキの音が聞こえてきます。ドキドキしながら妹を必死で探すあさえ…。

大人や道路の車、町の様子などすべてあさえの目を通して描かれていて、子どもの気持ちが伝わってきます。

## ロバのシルベスターとまほうの小石

ウィリアム・スタイグ 作 瀬田 貞二 訳  
評論社 2006年《アメリカ 1969》 31×23cm

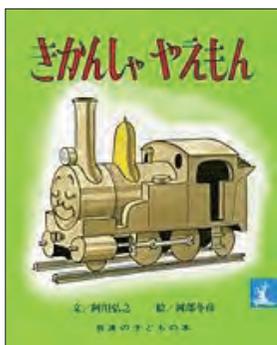


ロバのシルベスターは小石集めが大好きです。ある日、燃えるような赤い魔法の小石を見つけます。ところが、ライオンに出会ったため、あわてて自分に魔法をかけ、岩になってしまいます。助かったものの、そばに落とした赤い魔法の小石をひろえず、元にもどれなくなり、とほうにくれます。息子を案ずる両親は手をつくしますが、なすすべもありません。読者は魔法の小石に引き寄せられるように物語の世界に入り、シルベスターが岩になってからは、シルベスターの心の動きのままに一喜一憂します。

すてきな五月晴れのいちご山で、親子の願いがかなう結末は感動的です。

## きかんしゃやえもん

阿川 弘之 文 岡部 冬彦 絵  
岩波書店 1959年 21×17cm



蒸気機関車のやえもんは長い間働いたので、年をとりとくたびれていました。ある日、若い電気機関車にバカにされ、「しゃっ、しゃっ、しゃくだ」と怒りながら走ったものですから、吐き出した火の粉が稲むらにかり火事になってしまいました。やえもんは危うく鉄くずにされるところでしたが、運よく交通博物館に飾られることになりました。ハラハラドキドキする場面からほっとする結末に子どもたちも満足するようです。

走っている蒸気機関車を目にする事のない今ですが、やえもんが発するリズムカルでゆかいな言葉に、その汽車の動きやエネルギーが伝わってきます。

## きりのなかのはりねずみ

ユーリ・ルシテイン ユゲイ・コズロフ 作 マツチンスカ・ユリア・ソヴァ 絵  
こじま ひろこ 訳 福音館書店 2000年 31×22cm



幼い可愛いはりねずみが、仲良しのこぐまのいえを訪ねていくお話です。ふたりでおちやをのみながら、いっしょに星をかぞえるのです。こぐまの大好きないちごのはちみつを大事に持ち、日が沈み、あたりがうす暗くなるのを待って出掛けます。

こぐまのいえを訪ねていく道すがら、森や川やいろいろな動物との出会いがあり、ドキドキするようなはりねずみの小さな冒険物語を、繊細な筆づかいながらも、幻想的でソフトに描かれている絵によって、ほのぼのとした心安らぐ世界を醸し出しています。

1975年ロシアでアニメとして作られたものをもとに日本で絵本として出版されました。

## ウェン王子とトラ

チェン・ジャンホン 作・絵 平岡 敦 訳

徳間書店 2007年《フランス 2005》 29×29cm



昔、獵師に子どもを殺された母トラが、憎しみのあまり毎夜、村を襲うようになりました。困り果てた王に、国の占い師が「王子をトラに差し出せば国に平穩が訪れる」と予言します。王は苦しい決断の末、国民の平穩のため、幼い王子ウエンを森の奥に置き去りにします。置き去りにされた王子ウエンの近くに、母トラが大きな口を開けて近寄ってきました…。

母トラの愛情と、人と獣の世界を結びつけようとする王子ウエンに心を揺さぶられます。チェン・ジャンホンの迫力ある絵も見る人を引きつけ、とても魅力的です。

なお、中国には、昔、トラが人間の赤ちゃんを育てたという伝説があります。

## だいじょうぶ だいじょうぶ

いとう ひろし 作・絵

講談社 1995年 20×16cm



ぼくがまだ小さい時、おじいちゃんと毎日のように散歩し、色々な発見や驚きがあり楽しいことばかりでした。でも、僕がだんだん大きくなっていくと大変なことや嫌なことも経験するようになり、大きくなることへの不安がでてきました。そんな時、おじいちゃんはいつも手を取り、「だいじょうぶ だいじょうぶ」とおまじないのように言ってくれて、僕を助けてくれました。

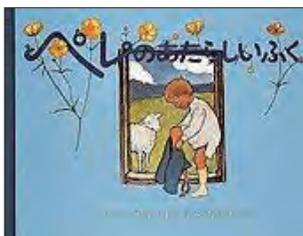
やがて、おじいちゃんが病気になってしまいます。

パステル調で描かれている色調が、やさしさにあふれ、子どもの成長を「だいじょうぶ だいじょうぶ」と応援してくれる一冊です。

## ペリのあたらしいふく

エルサ・ベスコフ 作・絵 おのでら ゆりこ 訳

福音館書店 1976年《スウェーデン 1910年代》 24×25cm



小さな少年ペリは、こひつじを一びき飼っていました。自分で世話をした自分だけのひつじです。こひつじは育ち、ペリも大きくなったので、ある日ペリは新しい服を作ろうと、こひつじの毛を刈りとります。その毛をすいてもらえるよう、おばあちゃんにたのむと、かわりに、にんじん畑の草取りを言いつかります。そうして、服が立って上がるまで、大人の手を借りなければならないペリは、身の丈に合う用事を大人たちから言いつかり、それをきちんとやりとげます。

服が出来上がり、ひつじにお礼を言いに行くときのペリの誇らしげな表情と、それをあたたかく見守る大人たちの笑顔。読む子どもの心に喜びを届けるとともに、大人も大切なことに気づく、そんな一冊です。

## ろくべえまってるよ

灰谷 健次郎 作 長 新太 絵  
文研出版 1978年 29×23cm



犬のろくべえが深い穴に落ちてしまいました。そこで一年生の子どもたち5人は、ろくべえを元気づけるために、歌を歌ってあげたり、ろくべえの好きなしゃぼんだまを吹いてあげたり、知恵をしぼって救い出そうとします。そのやり方や姿がおかしいけれど、子どもたちの真剣さがとてもほほえましく、一緒に応援したくなります。

自分たちで考え、行動する子どもたちがいきいきと描かれています。

## かもさんおとおり

ロバート・マックロスキー 文・絵 渡辺 茂男 訳  
福音館書店 1965年《アメリカ 1941》 31×24cm



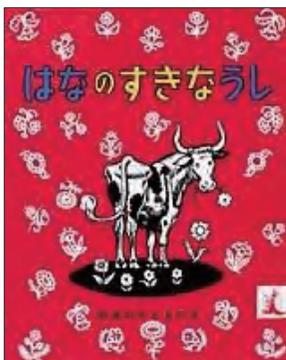
かものマラードさん夫婦はボストンの町で子育てに安全な場所を探しています。やっと川の中州に落ち着くと8羽のひなが産まれました。おくさんはこもたちに大事なことを教えると、夫のマラードさんの待つ公園へとお引越しをします。

大通りを横切るときは、車の警笛とかもたちの鳴き声を聞きつけた仲良しのおまわりさんが、交通整理をしてくれます。町の人たちに見守られながら無事公園に着きます。鼻を上に向けて、体をふりふり歩くかもたちを、茶色だけで描いた絵が素敵です。

『サリーのこけもつみ』(岩波書店)は紺色だけで描かれた絵本です。

## はなのすきなうし

マンロー・リーフ 文 ロバート・ローソン 絵 光吉 夏弥 訳  
岩波書店 1954年《アメリカ 1936》 21×17cm



フェルジナンドは小さい時から、木のかげで静かに花のにおいをかいているのが好きな牛でした。ほかの牛たちは闘牛の牛になるため、せっせと毎日角でつきあったり暴れまわったりしているのに、彼は争いのまねごとには興味ありません。そんなある日、ひよんなことから闘牛の牛に選ばれてしまいます。いよいよ闘牛場に引き出されますが…。

ところで、フェルジナンドのお母さんは、一人ぼっちの彼を心配しますが、さびしがっていないとわかったときすきなようにさせてやりました。「うしとはいうものの、よくものわかったおかあさんでした」という文が印象的です。

白地に黒で力強くも、緻密に描かれた絵がユーモラスです。

## チムとゆうかなせんちょうさん

エドワード・アーディゾーニ 文・絵 瀬田 貞二 訳  
福音館書店 2001年《イギリス 1936》 27×20cm



船乗りになりたくてたまらないチム。おとなになるまではだめという両親の言葉には、どうしてもあきらめきれません。ボートのおじさんの用事にくっついて汽船に乗りこみ、見事密航に成功。船長さんにはとても叱られますが、甲板そうじをがんばったチムは船員たちにみとめられるまでになりました。それからというものに進んで仕事をし、だんだんみんなから愛され楽しい毎日をすごします。しかし、ある日、嵐に遭い、そして最期の時を覚悟しますが…。読者はチムと一体になり、ハラハラドキドキしながら冒険を楽しむことができます。

他に、チムを主人公にしたお話は、シリーズで出ています。

## まあちゃんのながいかみ

たかどの ほうこ 文・絵  
福音館書店 1995年(こどものとも1989) 20×27cm



友だち2人は、髪のが長いのが自慢です。でもまあちゃんは短いおかつぱです。2人が背中がかくれるくらい伸ばすの、と言うとまあちゃんは、私はこれくらいと、その長さを例えて話します。橋の上からおさげをたらして魚が釣れるぐらい、遠くの牛をつかまえるロープ代わりになるぐらい…。洗ったり、ゆすいだり、とかしたりするのはどうするのとたずねられると、さらに想像を広げて話します。ふたりは、確かにそれはいいねとうっとりし…。

現実の場面はモノクロ、まあちゃんの自由奔放な想像場面はカラーで細かい部分まで豊かに描かれ、楽しませてくれます。

続編に『まあちゃんのまほう』(福音館書店)があります。

## あおい目のこねこ

エゴン・マチャーセン 作 瀬田 貞二 訳  
福音館書店 1965年《デンマーク 1945》 22×16cm



青い目の元気なこねこが、ねずみの国を探しに出かけます。途中、湖の魚にばかにされたり、恐ろしいものに出会ったり、黄色い目のこねこたちにいじめられたりして、ねずみの国がなかなか見つかりません。けれども、こねこはそのたびに、「なあにこんなことなんでもないや」と元気に旅を続けます。突然犬に吠えられ、びっくりして飛び上がった拍子に犬の背に落ちて…のクライマックスから、大満足の結末までの一気の盛り上がりは、子どもたちの大好きな場面のようです。

青い目と5ひきの黄色い目だけの彩色、ねこたちのユーモラスで動きのあるポーズと生き生きとした目の表情に引きつけられます。

## おやすみなさいフランス

ラッセル・ホーバン 文 ガース・ウィリアムズ 絵 松岡 享子 訳  
福音館書店 1966年《アメリカ 1960》 26×21cm

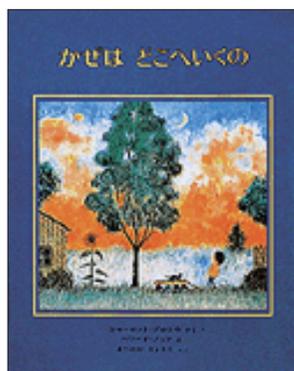


あなぐまのフランスは、寝る時間になってもぜんぜん眠くありません。ベッドに入ってもこわいものや気味の悪いものが次々に現れて、気になってしかたがないのです。そのつど、ベッドを出てお父さんのところへ訴えにいきます。フランスの「難問」に「うるさい」とか「さっさと寝なさい」とか言わずに、ていねいにつき合ってあげるお父さんの対応が見事です。親が子どもに話しかけるさまを、あざやかに巧みに描いています。

どこの家庭でも見られる子どもの日常生活に重ね、共感しながら読み進めることができるでしょう。

## かぜはどこへいくの

シャーロット・ゾロトウ 作 ハワード・ノッツ 絵 松岡 享子 訳  
偕成社 1981年《アメリカ 1975》 24×19cm



楽しかった一日の終わりに、小さな男の子がお母さんに「どうして昼はおしまいになるの?」と尋ねました。お母さんは「夜がはじめられるようによ」と答えます。すると男の子は、風がやんだら? 波がぐだけたら? 雨は? かぜはどこへ? など次々に尋ねます。そのたびにお母さんは自然の限りない営みを分かりやすく話します。そして、終わりは次への始まりであることを教えます。「おしまいになっちゃうものは、なんにもないんだね」と安心する男の子。

眠りにつく前のひととき、幼い子の質問とそれにていねいに答える母親とのやりとりを、繊細で美しい絵と詩的な文章で綴った絵本です。

## きょうはなんのひ?

瀬田 貞二 作 林 明子 絵  
福音館書店 1979年 25×21cm



朝、女の子はお母さんに気になる言葉を伝えて、学校へ出かけて行きました。お母さんは言われたとおりの場所を探し、手紙を見つけます。そして手紙に書かれたメッセージに沿い、なぜとよきの様に次々とたどっていきます。夕方、お父さんが帰宅し、お母さんと一緒になってさがし、ついに素敵なものにたどり着きました。両親の喜ぶ姿を見て女の子はとても嬉しそう。

両親の結婚記念日をめぐって、親と子の間に流れる家庭のぬくもりを、ほのぼのと感じさせる絵本です。

## きょうはみんなでクマがりだ

マイケル・J・ローゼン 再話 ヘレン・オクセンバリー 絵 山口 文生 訳  
評論社 1990年《イギリス 1989》 26×29cm



「きょうは みんなで クマがりだ つかまえるのは でかいやつ そらは すっかり はれてるし こわくなんか あるもんか!」繰り返しのフレーズで始まるこのお話は、すぐに子どもの気持ちを捉えます。くさはら、かわ、ぬかるみ、と数々の難所を「うえをこえては いかれない したを くぐつてもいかれない こまったぞ! とおりぬけるしか ないようだ!」と、つき進んでいく姿が、モノクロの素描とカラーで交互に描かれています。クマに出会えるのが、分かっていながら、それを待つ子どもたちの表情と、自然に子どもたちが唱える魔法の言葉のリズムが楽しい絵本です。

## ひとまねこざるときいろいぼうし

エッチ・エイ・レイ 文・絵 光吉 夏弥 訳  
岩波書店 1998年《アメリカ 1947》 21×17cm



知りたがり屋で人まねが大好きなおさるのジョージは、アフリカで楽しく暮らしていました。ある日、黄色い帽子のおじさんにつかまって船で町へ連れてこられます。ジョージはめずらしいものがおもしろくてたまりません。船では、カモメのとぶまねをして海に落ちたり、町に着いては、消防署に電話して消防自動車を出動させたり、風船の束をうっかりつかんで空高く舞い上がったり…、次から次へと騒ぎをひきおこします。

自由で活力にあふれ好奇心旺盛なジョージは、子どもたちの気持ちそのもの。生き生きとした表情や動きのある絵がお話とぴったりあって、子どもたちの心をひきつけます。

『ひとまねこざる』(岩波書店)他、シリーズは全部で6冊あります。

## ラチとらいおん

マレーク・ペロニカ ぶん・え とくなが やすもと 訳  
福音館書店 1965年《ハンガリー 1961》 16×24cm

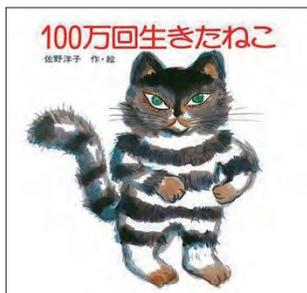


ラチは、世界中でいちばん弱虫です。犬がこわい、暗い部屋へひとりでは入れない、友だちと遊ぶのも苦手です。ある朝、目を覚ますと、ベッドのそばに小さな赤いライオンがいました。その赤いライオンは、ラチが強くなるように訓練してくれます。ラチはしだいに強くなり、いじめっ子にも勝つことができるようになりました。そして、やがて赤いライオンがいなくても強い自分になっていることに気づくのです。

不安やおそれを感じることの多い幼い子どもたちを力づけ、安心させてくれるふしぎな力を持った絵本です。

## 100万回生きたねこ

佐野 洋子 作・絵  
講談社 1977年 25×27cm



©JIROCHO, Inc. / KODANSHA

100万年も死なない立派なねこがいました。王さまや船乗り、サーカスの手品使いなど100万人の飼い主がそのねこをととても可愛がり、そのねこが死んだ時100万人の人が泣きました。ねこは100万回死んで100万回生まれ変わったのですが、一度も泣くことはありませんでした。ある時、ねこは自由なのねこになって、白い猫を好きになり家族になりました。そして白い猫が死んだとき…。

愛するものができ、愛し、愛された一生を送ることができた時、満身に死を迎えることができます。本当の幸せとは、本当の生き甲斐とはを考えさせられる物語です。

他に『わたしのぼうし』(ポプラ社)(講談社出版文化賞絵本部門賞受賞)『空とぶライオン』(講談社)など多数あります。

## よかったね ネットくん

シャーリップ 文・絵 八木田 宜子 訳  
偕成社 1997年《アメリカ 1964》 26×19cm



ある日ネット君にきた手紙は、びっくりパーティーの招待状。「でも、たいへん!」。パーティーは遠い遠いフロリダです。ネット君、友だちから飛行機を借りて出かけます。「よかった!」。ところが飛行機が爆発したり…。

「でも、たいへん!」でハラハラどきどき「よかった!」でほっとひと息。一喜一憂しながらお話が楽しめます。

幸運と不運が明るいカラーとモノクロのページで交互に展開し、見た目も分かりやすく工夫されています。

英語の原文も表記され、日本語と対応しながら楽しめます。

## 王さまと九人のきょうだい

赤羽 末吉 絵 君島 久子 訳  
岩波書店 1969年 26×20cm



中国のある村に、子どものいないとしより夫婦が、顔もからだつきもそっくりな九人の男の子を授かりました。九人のなまえは「ちからもち」「くいしんぼう」「はらいっぱい」「ぶつてくれ」「ながすね」「さむがりや」「あつがりや」「きつてくれ」「みずくぐり」といい、その名の通りの特技を持っていました。その九人がそれぞれに持っている力で協力し、みやこの宮殿で村人を困らせている悪い王さまを倒し、村人たちとしあわせに暮らすまでのお話です。

絵本からはみ出るほどの迫力と、やわらかい水彩画の美しい絵が魅力的で、お話を一層引き立てます。中国の民話です。

## しろいうさぎとくろいうさぎ

ガース・ウィリアムズ 文・絵 松岡 享子 訳  
福音館書店 1965年《アメリカ 1958》 32×24cm



白いうさぎと黒いうさぎ、2ひきの小さなうさぎが広い森の中で、仲良く暮らしていました。2ひきは一日中楽しく遊びました。けれども、ときどき悲しそうな顔をする黒いうさぎに白いうさぎが「どうしたの？」とたずねます。「ぼく、ねがいごとをしているんだよ。いつも、いつも、いつまでも、きみといっしょにいられますようにってさ」…。

2ひきのうさぎはみんなに祝福されて結婚します。

離れてしまう不安感や、いつも一緒にいたいという気持ちが伝わってきます。幸福感や優しさに満ちあふれた絵本です。

## くまとやまねこ

湯本 香樹実 文 酒井 駒子 絵  
河出書房新社 2008年 19×25cm

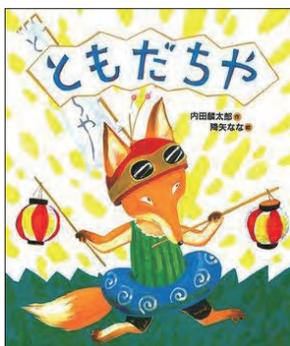


突然最愛の友小鳥をなくしたくまは、悲しみのあまり死んだ小鳥を箱に入れていつも持ち歩いていました。そして、とうとう暗く締め切った家の中に閉じこもってしまいます。ある日、久しぶりに外に出ると、山猫が「きみと小鳥のために一曲弾かせてくれ」とバイオリンを弾いてくれます。くまはその音楽を聴きながら、小鳥のことを全部思い出します。そして「小鳥はずっとずっと友だち」と前向きになっていきます。

大切なものを失った<sup>つら</sup>哀しみを乗り越えて生きる姿が、静かにじんわりと伝わってきてます。

## ともだちや

内田 麟太郎 作 降矢 なな 絵  
偕成社 1998年 25×21cm



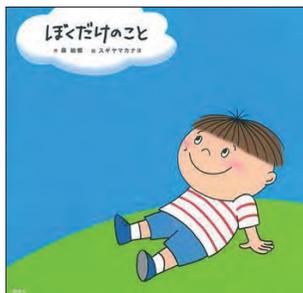
1時間100円でともだちになってあげることを思いついたきつねさん。おおかみと出会い、お金では得られない、本当のともだちの大切さに気がつきます。そして、本当は自分がいちばん、ともだちが欲しかったことにも。

子どもたちの実際の心の動きや行動をよくとらえており、子どもたちにとって、とても身近に思われ、親しみやすい絵本です。はっきりした色使いで描かれたきつねやおおかみの表情・動きと、おもしろい言葉のやりとりが興味を引きます。

『おれたち、ともだち』『ともだちくるかな』(偕成社)など7巻シリーズの作品です。

## ぼくだけのこと

森 絵都 作 スギヤマ カナヨ 絵  
偕成社 2013年 24×25cm



3人兄妹のなかで、僕だけほっぺにえくぼがある。これはちょっとうれしい僕だけのこと。家族4人のなかで、僕だけいつも蚊に刺される。これはちょっと困った僕だけのこと。クラス、学校、地域…のなかで、自分だけのことを見つけながら、お話しが展開していきます。ちょっと自慢したくなることがあったり、悲しいことがあったり、面目ないことがあったり…、たくさんいる人の中で、こんなに僕だけのことがあるなんてすごいことだ！と気がつくのです。

日常の中で、いろいろな視点から自分だけのことを見つける楽しさや、ありのままの自分を肯定し、かけがえのない存在であることに気づかせてくれる絵本です。

## くまのこうちょうせんせい

こんのひとみ 作 いもと ようこ 絵  
金の星社 2004年 24×25cm

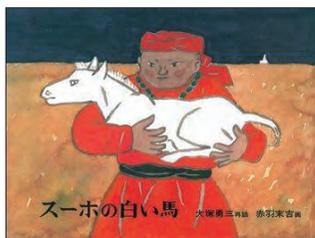


くまのこうちょうせんせいは、毎朝子どもたちを大きな声で元気に迎えてくれます。いつも声の小さいひつじ君に、「勇気を出して大きな声を出してみよう。」と励まします。でも心に傷を負っているひつじ君は、努力しますがなかなか大きな声が出せません。病気になったくまの校長先生も、大きな声が出なくなりました。そして…。

この絵本は、実話をもとにした作品です。NHKスペシャル「命の授業」で放映された、神奈川県茅ヶ崎市の浜之郷小学校の大瀬敏昭校長先生のようなすを絵本にしたものです。先生は末期ガンと宣告されながら、病院から学校に通い、弱りゆく自分の姿を子どもたちへありのままに見せ、命の尊さ、生きる意味を教え続けたのでした。

## スーホの白い馬

大塚 勇三 再話 赤羽 末吉 絵  
福音館書店 1967年 24×32cm



貧しい羊飼いの少年スーホは、自分の白馬を兄弟のように大事に育てていました。ある時、殿さまが主催する競馬大会に、その白馬に乗って出場し優勝しますが、その白馬を殿さまに奪われてしまいます。白馬は、殿さまの手から逃れようと必死な思いで走ります。そして、追手の矢に傷つきながらもスーホのもとにたどりつくのですが、そこで力尽きて、死んでしまうのです。

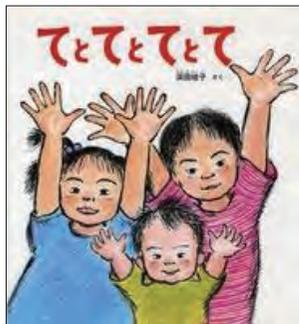
悲しみにくれたスーホに、白馬の思いが伝わり…。スーホは、白馬の骨や皮を使って、馬頭琴という楽器をつくりました。

スーホと白馬の強い絆に心ひかれる物語です。  
モンゴルの民話です。

## てとてとてとて

浜田 桂子 作

福音館書店 2008年(かがくのとも2002) 26×23cm



私たちの手は毎日いろいろなことをします。顔をあらう、ご飯を食べる、ボタンをはめる…。手をたたきリズムをつけて「タンタンタン！」

手は楽器になったり、身振り手振りで話すことができるコミュニケーションの道具になったり、点字を読む道具になったりします。不安や悲しいとき、手を握ってもらうことで心が落ち着き、自分に寄り添ってくれている安心感を覚えます。

毎日の生活の中で私たちは意識することもなく手を使っています。手の果たす役割を再認識させてくれ、「手はすばらしい！」と思える絵本です。

他に『あやちゃんのうまれたひ』(福音館書店)『日・中・韓平和絵本へいわってどんなこと?』(童心社)があります。

## おまえうまそうだな

宮西 達也 作・絵

ポプラ社 2003年 27×22cm



山が噴火し地震のさなか、アンキロサウルスの赤ちゃんがたまごから生まれました。さびしく歩いているところに、ティラノサウルスが現れました。「おまえ、うまそうだな」そう言って食べようとした時、「おとうさーん」と言って、しがみついていくのです。自分の名前を“うまそう”だと思ったのです。ここから奇妙な親子物語が始まります。他の恐竜から守ってやったり、生きていくための知恵をいろいろ教えてやったりします。が、やがて悲しい別れの日が…。

アンキロサウルスのけなげさや優しさが、ティラノサウルスをどんどんかえていくところがおかしくもあり、ほろりとさせてくれます。

他に『せいぎのみかた ドラフラ星人の巻』『おとうさんはウルトラマン』(学研)など多数あります。

## ほんとのおおきさ動物園

小宮 輝之/監修 福田 豊文/写真

学研 2008年 37×27cm



B4版の大きな本を開くと、目に飛び込んでくるのは、キラッと光る動物たちの瞳。実物大の顔写真に、大っきい、意外と小さい、可愛い、などなど。

瞳だけでなく、鼻、耳、口等、実際の動物園では観察できない細かい部分も実物大でよく見ることができます。右ページにはヒントがかかれていて、色々な発見ができ、子どもたちの探求心を高めます。

白いバックに鮮明な写真が、子どもの目をくぎ付けにします。紙芝居風にして、読み聞かせのできる図鑑絵本です。

他に『ほんとのおおきさ あかちゃん動物園』(学研)などシリーズで出ています。

## ちいさいおうち

バージニア・リー・バートン 文・絵 石井 桃子 訳  
岩波書店 1965年《アメリカ 1942》 24×26cm



静かないなかで、心を込めて造られたちいさいおうちは、ひなぎくの花やりんごの木そして畑に囲まれてとても幸せでした。

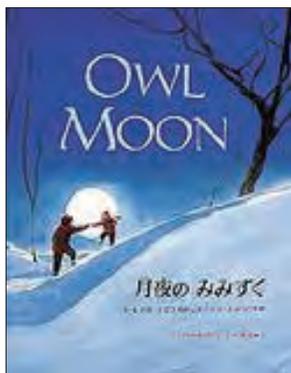
でも、まわりに工場がたち、電車が通って、いつしか大きなビルの谷間に挟まれて、窮屈で、みすばらしく放置され、ちいさいおうちはいなかの景色を夢みて寂しく思うのでした……。

ちいさいおうちの描き方に、人間の幸せ、本当の豊かさなど、大切なものを見逃さないようにと願う、著者の思いが込められているように感じられます。

アメリカ年間最優秀絵本「コールドコット賞」受賞(1942年)作品です。

## 月夜のみみずく

ジェイン・ヨーレン 作 ジョン・ショーエンハール 画 工藤 直子 訳  
偕成社 1989年《アメリカ 1987》 29×22cm



冬のよふけ、風はなく、月の光がきらきらと雪を照らします。野原に建つ家から出て、遠く汽笛を聞きながら、黙々と森をめざして歩くとうさんとわたし。

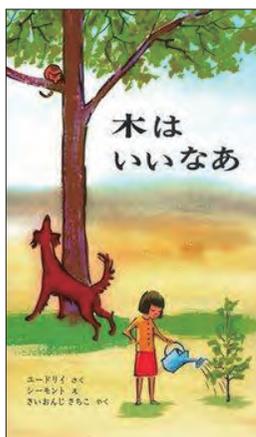
ずっと楽しみに待っていたみみずくさがし。わたしはとうさんのいいつけを頭の中で繰り返しながら、寒さを吹きとばし、とうさんの後を一生懸命歩きます。そして、とうとう……。

女の子のワクワクドキドキした気持ち、みみずくを見つけた時の感動が伝わってきます。

自然への敬意が、静かな抒情詩によって描かれています。

## 木はいいなあ

ジャニス・メイ・ユードリー 作 マーク・シーモント 絵 西園寺 祥子 訳  
偕成社 1976年《アメリカ 1956》 29×17cm

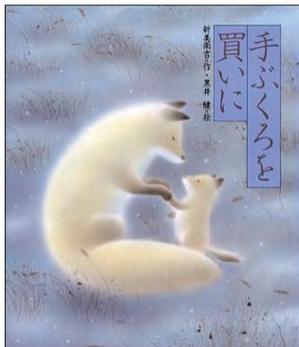


見わたすかぎり木がなかったとしたら、どんなにつまらないことでしょう。木のある生活のすばらしさを再認識させてくれる絵本です。一本の木の葉のかなでる音、紅葉の美しさ、落ち葉遊び、木のぼり、こかげでのひと休みなど、四季折々の木を中心とした人や生き物の生活風景が、優しく語りかけるように描かれています。モノクロとカラーのページを交互に配した構成が効果的でいっそう木々を引き立ててくれています。

一本の木を切り倒すことはたやすいけれど小さな苗木が大きくなるまでどれほど時間がかかることでしょう。昔登ったり遊んだりした木との思い出が、よみがえってきます。

## 手ぶくろを買いに

新美 南吉 作 黒井 健 絵  
偕成社 1988年 28×25cm



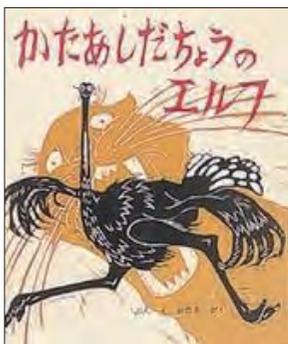
冷たい雪で牡丹色になった子狐の手を見て、母狐は毛糸の手袋を買ってやろうと思います。

その夜、母狐は子狐の片方の手を人の手にかえ、銅貨を握らせ、「かならず人間の手のほうをさしだすんだよ」と、よくよく言いふくめて町へ送り出しました。はたして子狐は、無事、手袋を買うことができるでしょうか。

黒井健の情感豊かな情景描写が、こころ温まる雰囲気醸し出し、新美南吉の「生存所属を越えた魂の交流」について、優しく訴えかけています。

## かたあしだちょうのエルフ

おのき がく 文・絵  
ポプラ社 1970年 25×22cm



一息で千メートルも走れるエルフは、若くて強くてすばらしく大きなおすのだちょうです。エルフは子どもが大好きで、動物の子どもたちを背中に乗せて、毎日楽しく暮らしていました。子どもたちも、エルフが大好きでした。みんなの中心にいて輝いていたエルフですが、ある日、大きなライオンが襲ってきて、体を張って闘いますが、片足を失ってしまいます。自分でえさをとることもできなくなり、忘れられた存在になりますが、エルフのところに大きな変化が…。

「本当の愛」とは、「本当の勇氣」とは何が、胸の奥深くに、エルフの思いがジーンと伝わってきます。

## だいちゃんとうみ

太田 大八 作・絵  
福音館書店 1992年(こどものとも1979) 20×27cm



夏休み、いとこの住む長崎の海辺の村に遊びに行っただいちゃんの日が詩情豊かに描かれています。

波のきらめき、しおさいの音、家族の夕餉の団らんといった懐かしい思い出が、美しい挿絵とともによみがえってくるような絵本です。

今ではなかなか経験できない、魚釣り、貝採り、水泳、杉鉄砲づくり、木の上のやぐらでの遊びなどが、縁どりのしっかりとした印象的な絵で描かれています。

この空気感を、多くの子どもたちに味わってほしい、そんな作品です。

## あらしのよるに

木村 裕一 作 あべ 弘士 絵  
講談社 2000年 24×19cm



あらしの夜、真っ暗な小屋の中で、運命の出会いをしてしまったヤギのメイとオオカミのガブ。食べられる側と食べる側という関係をこえて、ひみつの友達となった二人の友情がほほえましく描かれています。仲間に秘密を知られまいとするスリリングな展開あり、お互いの気持ちを試すストーリーあり、ついには友だちや仲間よりも、お互いの友情を選んだヤギとオオカミ…。

『あるはれたひに』『くものきれまに』『きりのなかで』『どしゃぶりのひに』『ふぶきのあした』『まんげつのよる』(講談社)へと続きます。

## よあけ

クリー・シュルヴィッツ 作・画 瀬田 貞二 訳  
福音館書店 1977年《アメリカ 1974》 24×26cm



音もなく静まりかえった湖畔の木の<sup>こぼれ</sup>下で、おじさんとまごが毛布で寝ています。夜明け前のしじま、そして黎明とともに山と湖の色があざやかに一変していきます。

モチーフとなった詩「漁翁」は老漁師をうたったものようですが、この絵本では、老漁師の代わりにおじさんとまごを配し、山あいの湖畔での<sup>さびしく</sup>素朴な営みを描いていますが、この絵本の主人公は、むしろ自然や色彩と言うべきでしょうか。

静かにページを捲りながら、色彩の持つ表現の豊かさを<sup>ほんのり</sup>堪能できる優れた絵本の一冊です。

## ともだち

谷川 俊太郎 文 和田 誠 絵  
玉川大学出版部 2002年 25×19cm

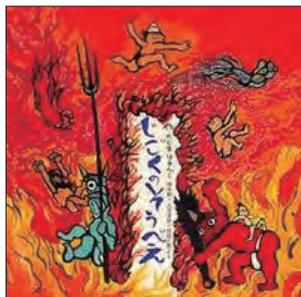


「ともだちって かせがうつつても へいきだって いってくるひと」、学校から一緒に帰りたくなる人、家族にも言えないことを相談できる人など、友だちとは？ということをつかりやすい言葉と絵で考えさせてくれます。そして、相手のことを思いやる気持ちはやがて、会ったことがない人へと思いをはせることにもつながります。

身近なものから世界へ意識を広げる言葉は、子どもたちの心へ素直に届き、豊かな人間性を育んでくれるでしょう。子どもだけではなく大人にも新しい発見があります。高学年にはぜひ読んであげたい、読ませたい本です。

## じごくのそうべえ

川島 征彦 作 桂米朝・上方落語・地獄八景より  
 童心社 1978年 25×25cm



かるわざしのそうべえは、足を踏み外して真っ逆さま。着いたところはなんと死後の世界。えんま様に地獄行きを告げられ、次々に地獄の責め苦しみに遭わされそうになりますが…。

上方落語の大作が絵本になった作品で、関西弁のノリと、奇想天外なお話に大笑いです。落語家の桂米朝さんはこの絵本に寄せて、「えんまが舌を抜いたり、三途の川や針の山の知識が消滅してしまったら、落語もやりにくくなります。この絵本がその穴埋めをしてくれたら…。と願っている次第です。」と書いています。

他に『そうべえごくらくへゆく』『そうべえまっくろけのけ』(童心社)などがあります。

## 落語絵本 まんじゅうこわい

川端 誠 作・絵  
 クレヨンハウス 1996年 31×22cm



町内の若いもの集まりで、嫌いな生き物の話に。へび、たぬき、くも、こうもり、毛虫…。でも松つあんだけは、きらいなものがないらしい。おっと、ひとつだけありました。思い出だけでふるえがきて、気分が悪くなるこわいものが。それがなんと「まんじゅう」。ふだんから、みんなは松つあんのことを、いやなやつだと思っていたものですから、みんなでまんじゅうを集めて驚かすことに…。

節回しの良い言葉や耳ざわりの良い言葉に、読み手も聞き手も気分爽快になることでしょう。

他に『じゅげむ』『ばけものつかい』『めぐろのさんま』(クレヨンハウス)など、落語絵本が全8巻あります。

## しずくのぼうけん

マリア・テルリコフスカ 作 ボフダン・ブテンコ 絵 内田 莉紗子 訳  
 福音館書店 1969年《ポーランド 1965》 20×23cm



おばさんのバケツからぴしゃんととび出したしずくが旅に出ます。まずは汚れた体をきれいにしようとしてクリーニング屋さんに行くけれど無理だとわかります。次に向かったのは病院ですが、煮沸されそうになり、逃げ出します。それから水蒸気になったり氷になったり水道の中を通ったり…しずくの冒険が続きます。

自然の中の水のサイクルを、子どもたちにも分かるように仕立てられた絵本です。リズムのある文章や漫画風な絵で楽しみながら科学の世界に引き込んでくれます。

## チャーリー・ブラウンなぜなんだい？

チャールズ・M・シュルツ 文・絵 細谷 亮太 訳  
岩崎書店 1991年《アメリカ 1991》 25×22cm



「ともだちがおもい病気になったとき」という副題がついています。

きれいな金髪の小柄な女の子ジャンスは、血液のガンの白血病にかかって入院しました。お見舞いに行ったライナスとブラウンは病気についていろいろ考えます。周りの子どもたちは、白血病はうつるとか言って、髪の毛が抜けたジャンスをからかったりします。心ないいじめに遭い、ジャンスは辛い思いをします。ライナスはいつもジャンスを守ろうとがんばります。

生きる上で欠かせない人間の愛と絆の大切さを、豊かな感性と温かさで語りかけてきます。

## チロヌップのきつね

たかはし ひろゆき 文・絵  
金の星社 1972年 24×25cm



北の海の小さなチロヌップという島に、たくさんのきつねが住んでいました。毎年、春から秋の間、この島に老夫婦が魚や昆布を採りにやってきます。親にはぐれた子ぎつねの“ちびこ”はこの老夫婦になつき、夏の間中いつも一緒に過ごしました。冬が近づき、老夫婦は昆布や魚をいっぱい積んで、来年もちび子に逢えるのを楽しみに島を去りました。

親元に戻った“ちび子”と、きつねの親子の愛情あふれる穏やかな平和な暮らしが始まりましたが、ある日鉄砲の音がして……。

戦争がきつねたちを、悲しい運命に追い込んでいきます。

きつねの親子の情愛を通して、人と人、国と国とがあらそうことのおそろしさ、悲しさが伝わってきます。

## ゆめくい小人

ミヒヤエル＝エンデ 作 アンネゲルト＝フックス＝バー 絵  
佐藤 真理子 訳 偕成社 1981年《ドイツ 1978》 24×22cm



怖い夢を見て夜がきれいになった経験はありませんか？お子さんは大丈夫？そんな時にぴったりのとっておきの絵本です。

物語の舞台“まどろみ国”では ねむることが一番大事な仕事です。そんな国のおひめさまが怖い夢を見て眠れなくなってしまいました。この大変な事態に王さまは困り、とうとうみずから薬探しの旅に出たのです。そして、きみのわるい荒野で不思議な小人に出会います。この小人こそゆめくい小人。唱えるだけでぐっすり眠れる不思議な呪文を教えてください。さて、どんな呪文か…。

他に『はだかのサイ』（フレーベル館）があります。

## わすれられないおくりもの

スーザン・バーレイ 作・絵 小川 仁央 訳  
評論社 1986年《イギリス 1984》 21×26cm



物知りで、賢く、困っている友だちは誰でも助け、みんなから頼りにされているアナグマが、独り静かに死んでしまいました。残された森のみんなは、アナグマをととても愛していたので、悲しくてどうして良いかわかりませんでした。でも、みんなは、優しいアナグマとの関わりをお互いに話し合い、アナグマの残してくれた知恵や工夫を生かすことで、それぞれ哀しみから立ち直っていきます。

この物語は、身近な人の死の悲しみから立ち直る友だちどうしのあり方や、人間の生き方を語りかけてくれます。

## さっちゃんのまほうのて

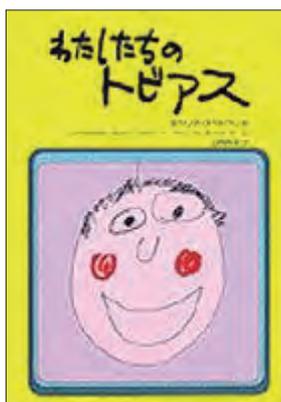
たばた せいいち 文・絵  
偕成社 1985年 27×19cm



さっちゃんの右の手には、五本の指がありません。幼稚園でままごとあそびをするとき、そのことが原因で友だちのまりちゃんといけんかになってしまいました。「さっちゃんはおかあさんになれないよ！だって、てのないおかあさんてへんだもん」。友だちから言われたこの言葉に、傷つくさっちゃん。「どうして みんなみたいに ゆびがないの」とさっちゃんはお母さんにくやしさをぶつけます。それに対して、真剣になってさとお母さんに心うたれます。人とのちがいに不安をいなくさっちゃん、父や母の語りかける言葉に、丸ごとの自分を受け止めて成長していこうとするさっちゃん。心にじーんとしみる絵本です。

## わたしたちのトビアス

セシリア・スベドベリ 編 ヨルゲンほか 文・絵 山内 清子 訳  
偕成社 1978年《スウェーデン 1975》 22×16cm



4人兄弟の末っ子トビアスはダウン症でした。両親はトビアスを施設に預けようかと考えますが、兄弟の反対で家で暮らすことになりました。トビアスと一緒に生活することで、その障害を理解し、互いに良好な関わり方を学んでいきます。

この本は7歳の姉ヨハンが絵を描き、子どもたちの思いや考えを母親がまとめたもので、続編もあります。

ダウン症のある子どもとその家族生活を描いたノンフィクションの作品です。

## からすたろう

八島 太郎 文・絵

偕成社 1979年《アメリカ 1955》 31×23cm



「ちび」とよばれた男の子は、学校では誰ともなじめず、勉強もせず、友だちからはのけものにされ、いじめられていました。でも、6年間1日も休まず、遠くの山から毎日2時間かけて通い続けました。

6年生のとき担任になったいそべ先生は、「ちび」が自然のことをとてもよく知っているのに感心して、カラスの様々な種類の鳴き声を、学芸会で披露させました。みんなはそのすばらしさに感動します。

人の個性や才能は一樣ではなく、それぞれの個性の違いを理解し、互いに認めあう事の大切さを感じさせてくれます。また、一人の教師の導きが勇気を与え、人生を救い、周りの人々の心を変えていく事を教えてくれます。

他に『あまがさ』(福音館書店)があります。

## にぐるまひいて

ドナルド・ホール 文 パーバラ・クーニー 絵 もき かずこ 訳

ほるぶ出版 1985年《アメリカ 1979》 21×27cm



「人びとの生活と 自然のために」とだけ書かれたページをめくると、紅葉に彩られた風景のなか、牛にひかれる水色の荷車が描かれています。10月。ニューイングランドの、ある家族の父さんが、この一年間にみんなが作り育てたものを何もかも積み込んで、遠い遠い市場まで行きます。そして、牛や荷車までも売ってしまいます。その大事なお金で少しの必需品を買って帰り、そこからまた新しい一年が始まるのです。

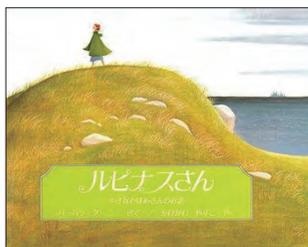
古きよき時代のつましやかな人々の暮らし、それは現代の私たちが忘れてはならない大切な原点とも言え、味わい深いものがあります。

木版に描いたというこの作品は、1980年コルデコットを受賞しています。

## ルピナスさん

パーバラ・クーニー 作 掛川 恭子 訳

ほるぶ出版 1987年《アメリカ 1982》 21×27cm



ルピナスさんは、幼いころおじいさんと三つの約束をしました。一つ目は、大きくなったら遠い国へ行くこと。二つ目は、年をとったら海辺の町に住むこと。そして三つ目は、世の中をもっと美しくするために何かをすることでした。ルピナスさんはその約束をどのようにしてはたしたのでしょうか。

この一冊に、ひとりの小さなおばあさんの一生の時間が、描かれています。

やさしく美しい絵は、何度読んでも静かな喜びを与えてくれ、たのしませてくれます。

1983年に全米図書賞を受賞した作品です。

## いのちのおはなし

日野原 重明 文 村上 康成 絵  
講談社 2007年 21×22cm



「いのちは、どこにあると思いますか？」こんな問いかけをしながら、100歳を超えた日野原医師の授業を再現している絵本です。いのちを線で表したり、聴診器で心臓の音を聞かせたり、子どもたちに体験させながら、生きていることを実感させます。子どもたちのいろいろな意見を聞いた後に日野原医師は、「いのちは、きみたちの持っている時間だといえます」と、医師らしい説明を加えながら、時間をつかうことはいのちをつかうことだとわかりやすく伝えていきます。

授業中の日野原医師の笑顔や子ども達の驚き、喜びが絵本の中にいきいきと描かれています。

## ひまわりのおか

ひまわりをうえた八人のお母さんと 葉方 丹 文 松成 真理子 絵  
岩崎書店 2012年 28×22cm



「津波がくる！」子どもたちが、丘の上の花壇に向かって歩きだしたとき、大きな大きな津波が、みんなをのみこみました。74人の子どもたちと10人の先生の命をうばいました。宮城県石巻市立大川小学校のお母さんたちは、子どもたちが行きたかった丘にひまわりの種をまきました。お母さんたちはひまわりの世話をしながら、子どもたちのことを話します…。

現地に出向いた作者が、お母さんたちの辛い悲しみや深い愛情が込められた手紙をもとに作り上げた絵本です。子を想う果てのない母親の心と震災を忘れてはならないことが伝わってきます。

他に『つなみてんでんこ はしれ、上へ！』（ポプラ社）『ふくしまからきた子』（岩崎書店）など震災に関する絵本があります。

## ちえのあつまりくふうのちから かこ・さとし かがくの本 (10)

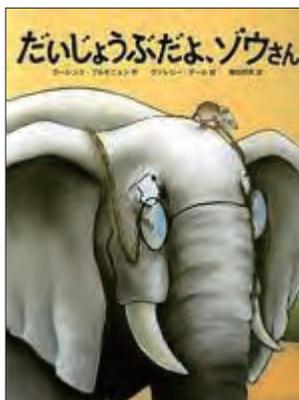
かこ さとし 著 滝平 二郎 絵  
童心社 1993年 26×19cm



わたしたちの先祖は、土器や銅や鉄を、どのように発見したのでしょうか。そんな疑問に答えてくれるのがこの本です。この本は、わたしたちの身の回りにある道具が、何千年何万年という長い年月をかけ、知恵を集め工夫を重ね、たゆまぬ積み重ねと努力で、今日のようなものにいたったことを、説得力のある分かりやすいことばと絵で、小さな読者に提供してくれています。

このシリーズ(全10巻)は、小さい子どもと実験ができるよう配慮され、そして科学の知識も得られるようになっています。

## だいじょうぶだよ、ゾウさん



ローレンス・ブルギニョン 作 ヴァレリー・ダール 絵 柳田 邦男 訳  
文溪堂 2005年《ベルギー 2004》 28×23cm

幼いネズミくんは年老いたゾウさんに「いっちゃいやだ」といいます。しかし、弱ってきたゾウさんを一生懸命ケアするうちに、心が成長して、ゾウさんがゾウの国に渡るつり橋を、ネズミくんは修理してあげます。そして、「こわがらないで」といって見送るのです。ゾウさんは「だいじょうぶ」といって渡っていきました。

一生の中でとても大事な「死」を、ネズミくんとゾウさんの心の交流を通して優しく温かく描いています。特に、ネズミくんの表情がとても豊かで、何とも可愛らしく描かれていますので、その表情がじゅうぶんに読みとれるくらい的人数で読んであげるのに適しています。

## あさになったのでまどをあけますよ



荒井 良二 著者  
偕成社 2011年 30×22cm

本を開くと、朝の光と心地よい風に出会うことができます。窓を開けると、朝の光がずっと射しこんで、そこにはいつもとかわらない美しい景色や日常生活が広がります。この毎日くりかえされる日常の風景にどれだけ安心し、癒されていることでしょうか。

この日常を震災で失った方々はいかに心細いことでしょうか。

どんな時にも明けない朝はありません。そんな希望と勇気を与えてくれる絵本です。

作者は『はっぴいさん』（偕成社）でリンド・グリーン記念文学賞を日本人で初めて受賞しました。

## ヤクーバとライオン | 勇気 || 信頼



ティエリー・デデュー 作 柳田 邦男 訳  
講談社 2008年《フランス 勇気1994 信頼2007》 31×25cm

アフリカの少年ヤクーバが一人前の戦士になるには、独りでライオンと戦って倒さなければなりません。ついにライオンと出会いましたが、そのライオンは瀕死のけがを負っていました。傷ついたライオンをしめてて荣誉ある兵士になるか？殺さないで気高い心を持った人間として戻り、仲間はずれになるか？…。

2作目の「信頼」も続けて読むと感動がいちだんと膨らみ、作者のより深いメッセージが強く伝わってきます。“真の勇気とは？”“真の信頼とは？”を考えさせられる物語です。

## 海のいのち



立松 和平 文 伊勢 英子 絵  
ポプラ社 1992年 29×22cm

太一は、季節や時間の流れと共に変わる海のどんな表情でも好きでした。「ぼくは漁師になるんだ。お父と一緒に海に出るんだ」とってはばかりませんでした。父は優れたもぐり漁師でした。潮の流れが速くて誰にももぐれない瀬に、たったひとりでもぐっては、岩陰にひそむクエについてきました。

ある日、父は夕方になっても帰りませんでした。

村一番の漁師として成長した太一は、やがて父をやぶった瀬の主クエと対峙することに……。命の尊厳、生きとし生けるものへの畏怖の念を、壮大な大自然をバックに若き漁師太一の姿を通して、あますことなく描き切っています。

## くにのはじまり



舟崎 克彦 文 赤羽 末吉 絵  
あかね書房 1995年 23×31cm

この世のはじめの神が、男神伊邪那岐と女神伊邪那美に国をつくるように命じて、下界に送ります。二人は結婚して子どもを生み、その子たちが神々になり日本列島ができます。伊邪那美は、最後の火の神を生むと死んでしまい、黄泉の国へ行ってしまう。伊邪那岐は妻に会いに行きますが、姿を見ないで欲しいという約束をやぶったので、女鬼たちや妻に追われ、逃げ帰ります。伊邪那岐が、死者の国の穢れをおとすため、水辺でみそぎをおこなうと、天照大御神、月読神、須佐之男の命が生まれました。

本格的な日本の神話絵本で、『あまのいわと』『やまのおろち』『いなばのしろさき』『すさのおとおおくにぬし』『うみさちやまさち』へと続きます。(全6巻)

## 風が吹くとき



レイモンド・ブリッグズ 作 さくま ゆみこ 訳  
あすなろ書房 1998年《イギリス 1982》 30×22cm

定年退職後、田舎に引っ越したジムは図書館通いをしているうち、戦争が始まることを新聞で知りました。妻のヒルダは信じません。しかし、ラジオで開戦が放送されたのです。

第二次世界大戦が勝利に終わっているのに、ジムは負けるはずはないと信じ、政府がすすめる簡易シェルターを作りました。原爆が投下されました。簡易シェルターなど役に立ちません。それでもジムは政府の救済を信じていました。しかし…。

出版元のハミッシュ・ハミルトンはこの本を上下両議院に配り、サッチャー首相も議会在休会になったら読んでみたいと言っていたそうです。

## おおきな木

シェル・シルヴァスタイン 文・絵 村上 春樹 訳  
あすなろ書房 1976年《アメリカ 1964》 23×18cm



「あるところに 一本の木がありました。その木は ひとりの少年のことが だいすきでした。」という出だしで始まる「おおきな木」は、原題を“The Giving Tree”といいます。文字通り訳せば「与える木」です。

一本のりんごの木は愛する少年が成長し老いていく節目、節目で、葉・果実・枝・幹…を与え続けます。美しい感情、喜び、希望、悲しみ、苦しみ、あきらめ…「それでも幸せでした」で物語は終わります。

ペン画のすっきりしたタッチで描かれた絵と相まって、私たちの心に愛することとは何だろうと迫ってきます。

『おおきな木』は、かつて篠崎書林から本田錦一郎訳で出版されていました。

## アンジュール ある犬の物語

ガブリエル・バンサン 作  
BL出版 1986年《ベルギー 1982》 19×26cm



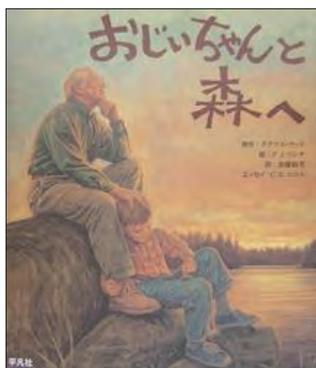
疾走するマイカーから一匹の犬が放り投げられるようにして捨てられるというショッキングな場面からこの物語は始まります。——戸惑い、諦め、孤独、悲哀といった感情を押し込めたような表情で立つ姿——でも優しいまなざしで自分を見つめている孤独そうな少年との出逢い。少年の身体に頸をすり寄せている犬の姿に、温もりと救いを暗示して物語は終わります。

全編を通して全く文字がありません。この絵本には文字は不用というべきでしょう。それ程に、50を超えるデッサン画風の描画——繊細にしてかつ大胆なタッチ——鋭い感性が圧倒的な迫力をもって訴えかけてきます。

産経児童出版文化賞美術賞を受賞しています。

## おじいちゃんと森へ

ダグラス・ウッド 文 P.J.リンチ 絵 加藤 則芳 訳  
平凡社 2004年《イギリス 2000》 29×26cm



ぼくが幼かったころいちばんの友だちはおじいちゃんでした。おじいちゃんとは一緒に散歩することが大好きでした。おじいちゃんと散歩しながら、木や岩そして水、小鳥、草花など、自然の営みとの対話を通して、ぼくは「祈り」について学んでいきました。そのおじいちゃんの「死」を、ぼくが祈りきれないほど祈っても免れることができず、その後祈りのない日が長かつつき、やがて…。

絵本にしては各ページとも長文ですが、優れた文と、見開きで描かれている各ページの絵が絵画としての芸術性を十分備えていて、深い精神性を、優しくそして分かりやすく、私たちに語りかけてくれます。特に、おじいちゃんとぼくの描画が素晴らしいです。

## ローザ

ニッキ・ジョヴァンニ 文 ブライアン・コリアー 絵 さくま ゆみこ 訳  
光村教育図書 2007年《アメリカ 2005》 29×23cm

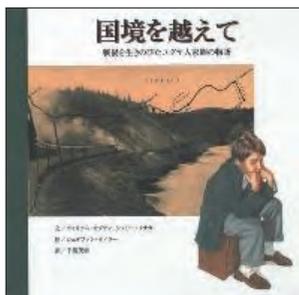


日常生活のあらゆるところで、黒人と白人は隔離されていました。バスの乗り方にもルールがあり、席も分けられていました。ただし、中間席というものがある、そこはどちらが座ってもよいことになっているのですが、黒人は白人に席を空けなければいけなかったのです。そんな時代にローザは“ノー”と言ったのです。アメリカの公民権運動の母と呼ばれるひとりの女性の実話をもとになっている、迫力のある絵本です。

2006年コールドコット賞オナー賞受賞作品です。公民権運動を謳ったものとしては、キング牧師の『わたしには夢がある』（光村教育図書）などがあります。

## 国境を越えて

ウィリアム・カプラン、シェリー・タナカ 文 シュテファン・ティラー 絵  
千葉 茂樹 訳 BL出版 2001年《カナダ 1998》 26×26cm



1939年、第2次世界大戦が勃発する寸前、ナチス・ドイツの迫害をのがれて地球の4分の3にもおよぶ距離を、一年半にわたって旅し続けたユダヤ人家族の実話を、少年イーゴルの目を通して描いている絵本です。国境は次々に閉ざされ、収容所に送りこまれる人々でいっぱいの状況のなか、カプラン家の人々は幸運にも最後の発行となったビザを、リトアニアの外交官だった杉原千畝さんから出してもらうことができ、日本を経由してカナダまで行くことができました。カプラン家の人々はまさに紙一重の幸運によって命をつなぎとめたことがこの本から伝わってきます。

本書に掲載されている歴史的背景の解説や写真は、貴重な生きた資料として人々の記憶に長くとどめられることでしょう。

## ラブ・ユー・フォーエバー

ロバート・マンチ 作 梅田 俊作 絵 乃木 りか 訳  
岩崎書店 1997年 23×22cm



「♪アイ・ラブ・ユーいつまでも」「♪アイ・ラブ・ユーどんなときも」とお母さんが赤ちゃんを抱きながら歌います。子どもが成長するたびに大変なことが起こります。でも、お母さんはどんなときもこの歌を歌い、抱きしめ、眠りにつかせます。大人になった子どもにもこの歌を歌い続けますが、年を重ねたお母さんは歌えなくなります。そして、子どもはお母さんを抱きながら歌うのです。

母の愛情の深さとその歌の持つ力を感じ、涙が自然とこぼれてきます。

1986年にカナダで出版され、アメリカで評判になったものを、日本では、画家を変えて出版されたものです。



## そのほかにおすすめしたい絵本



**いつもいっしょに**  
こんの ひとみ 作  
いも ようこ 絵  
金の星社

**おばけのてんぷら**  
せな けいこ 作・絵  
ポプラ社

**カーくん**と森のなかまたち  
吉沢 誠 作  
夢ら丘 実果 画  
ワイズ・アウル

**ええところ**  
くすのき しげのり 作  
ふるしょう ようこ 絵  
学研教育出版

**うらしまたろう**  
時田 史郎 再話  
秋野 不矩 絵  
福音館書店

**ぼくとびたくないんだ**  
のらり&くらり 作・絵  
アスラン書房

**ふるやのもり**  
いまえ よしとも 作  
まつやま ふみお 絵  
ポプラ社

**こびとのくつやさん**  
グリム童話  
西本 鶏介 文  
ひかりのくに

**みるなのくら**  
小澤 俊夫 再話  
赤羽 末吉 画  
福音館書店

**かえるをのんだととさん**  
日野 十成 再話  
斉藤 隆夫 絵  
福音館書店

**しげちゃん**  
室井 滋 作  
長谷川 義史 絵  
金の星社

**もけらもけら**  
山下 洋輔 作  
元永 定正 画  
福音館書店

**おでかけのまえに**  
筒井 頼子 作  
林 明子 絵  
福音館書店

**ちょろりんの  
すてきなセーター**  
降矢 なな 作・絵  
福音館書店

**プーアの森**  
せがわ きり 作  
忌野 清志郎 画  
TOKYO FM出版



そのほかにおすすめしたい絵本



わんぱくだんのおばけやしき

わんぱくだんシリーズ  
ゆきの ゆみこ 作  
ひさかたチャイルド

ターちゃんとペリカン

ドン・フリーマン 作・絵  
さいおんじ さちこ 訳  
ほるぷ出版

ねすみじょうど

瀬田 貞二 再話  
丸木 位里 画  
福音館書店

おっきょちゃんとかっぱ

長谷川 摂子 作  
降矢 なな 絵  
福音館書店

ぶたたぬききつねねこ

馬場 のぼる 作・絵  
こぐま社

おなら

長 新太 作  
福音館書店

ぼくたち ともだち

中川 ひろたか 作  
ひろかわ さえこ 絵  
アリス館

やさいのおなか

きうち かつ 作・絵  
福音館書店

雨、あめ

ピーター・スピアー 絵  
評論社

ちいさなうさこちゃん

ディック・ブルーナ 文・絵  
石井 桃子 訳  
福音館書店

子どもとよむ

日本の昔ばなし(全30巻)  
小澤 俊夫 監修・再話  
くもん出版

おやすみ、ぼく

アンドリュー・ダッド 文  
エマ・クエイ 絵  
滝合 恵子 訳  
クレヨンハウス

ウラパン・オコサ

かずあそび  
谷川 晃一 作・絵  
童心社

わゴムは  
どのくらいのびるかしら？

マイク・サーラー 作  
ジェリー・ジョイナー 絵  
ほるぷ出版

ちいさなサンタまちにいく

アヌ・ストーナー 作  
ヘンリケ・ウィルソン 絵  
岩崎書店



## そのほかにおすすめしたい絵本



### がまんだがまんだ うんちっち

梅田 俊作／佳子／海緒 作・絵  
岩崎書店

### あけるな

谷川 俊太郎 作  
安野 光雅 絵  
銀河社

### 葉っぱのフレディ

-いのちの旅-  
レオ・バスカーリア 作  
島田 光雄 絵 みらい なな 訳  
童話屋

### 天の笛

斎藤 隆介 作  
藤城 清治 絵  
佼成出版社

### へいわってすてきだね

安里 有生 詩  
長谷川 義史 画  
ブロンズ新社

### きつねのホイティ

シビル・ウェッタシンハ 作  
まつおか きょうこ 訳  
福音館書店

### 3びきのくま

トルストイ 文  
バスネツォフ 絵  
おがさわら とよき 訳  
福音館書店

### ジUMANジ

クリス・バン・オールスバーグ 作  
へんみ まさなお 訳  
ほるぷ出版

### ぼくのぼうけん

なかの ひろたか 作  
福音館書店

### よだかの星

宮沢 賢治 原作  
いせ ひでこ 絵  
講談社

### 半日村

斎藤 隆介 作  
滝平 二郎 絵  
出版社: 岩崎書店

### まりーちゃんとひつじ

フランソワーズ 作・絵  
与田 準一 訳  
岩波書店

### おつかい

さとう わきこ 作  
福音館書店

### おこだでませんように

くすのき しげのり 作  
石井 聖岳 絵  
小学館

### おっしょこぼうや

ウラジーミル・ラドゥンスキー 作  
木坂 涼 訳  
らんか社